

那珂 91

—那珂遺跡群第 185 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1507 集

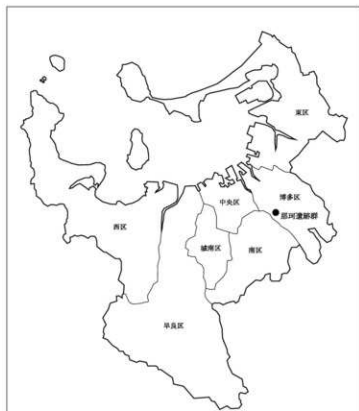
2024

福岡市教育委員会

那珂 91

—那珂遺跡群第 185 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1507 集



調査番号 2107

調査略号 NAK-185

2024

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めでもあります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は建物建設工事に伴う那珂遺跡群第 185 次調査について報告するものです。調査では飛鳥時代の溝などが確認され特殊な土地利用の一端を明らかにすることができました。

本書が文化財保護へのご理解とご協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 石橋 正信

例言

1. 本書は博多区竹下5丁目地内の建物建設に伴い実施した那珂遺跡群第185次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3. 本書に使用した国土座標値は、すべて世界測地系（第Ⅱ座標系）による。
4. 本書に使用した方位は、すべて座標北である。
5. 本文中に使用した遺構略号とその性格は、以下の通りである。
SB：掘立柱建物 SC：竪穴建物 SD：溝 SE：井戸 SK：土坑 SP：ピット SX：その他
6. 本書に掲載した遺物の番号は通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
7. 本書に使用した遺構実測は池田祐司、鶴来航介が作成した。
8. 本書に掲載した挿図の作成、製図、写真撮影、執筆は鶴来がおこなった。
9. 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。
10. 本書の編集は、鶴来がおこなった。

遺跡名	那珂遺跡群	調査回数	185次	調査略号	NAK-185
調査番号	2107	分布地図図幅	塩原	遺跡登録番号	0085
申請地面積	1,497 m ²	調査対象面積	820.14 m ²	調査面積	850.04 m ²
調査期間	令和3(2021)年4月19日～8月10日		事前番号	2020-2-788	
調査地	福岡市博多区竹下5丁目444				

本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	1
II. 調査の記録	7
1. 調査の概要と経過	7
2. 土層	7
3. 掘立柱建物 (SB)	8
4. 竪穴建物 (SC)	12
5. 溝 (SD)	13
6. 井戸 (SE)	31
7. 土坑 (SK)	35
8. 落込み (SX)	36
9. その他の出土遺物	39
III. まとめ	42

挿図目次

図1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
図2 那珂遺跡群全体図 (1/7,500)	3
図3 185次調査地点の位置 (1/2000)	4
図4 調査区位置図 (1/500)	5
図5 遺構配置図 (1/150)	6
図6 土層模式図	7
図7 掘立柱建物1 (1/60)	9
図8 掘立柱建物2 (1/60)	11
図9 掘立柱建物3 (1/60)	12
図10 SC035 (1/60)	12
図11 SC035出土遺物 (1/3)	12
図12 SD001-1 (1/80)	13
図13 SD001-2 (1/80)	14
図14 SD001出土遺物1 (1/3)	15
図15 SD001出土遺物2 (1/3)	16
図16 SD001出土遺物3 (1/6)	17
図17 SD001出土遺物4 (1/3)	18
図18 SD001出土遺物5 (1/3)	19
図19 SD001出土遺物6 (1/3)	20
図20 SD001出土遺物7 (1/3)	21

図 21	SD001 出土遺物 8 (1/2・3)	22
図 22	SD001 上層 2 出土遺物 (1/1・3)	23
図 23	SD001 中層・下層出土遺物 (1/3)	24
図 24	SD002 (1/80)	25
図 25	SD012 (1/60)	26
図 26	SD013 (1/80)	26
図 27	SD012・014 出土遺物 (1/3)	26
図 28	SD014 (1/60)	27
図 29	SD022 (1/150)	27
図 30	SD022 出土遺物 1 (1/3)	28
図 31	SD022 出土遺物 2 (1/3)	29
図 32	SD024 (1/120)	29
図 33	SD026 (1/80)	30
図 34	SD029 (1/80)	30
図 35	SD033 (1/60)	30
図 36	SE031 (1/40)	31
図 37	SE031 出土遺物 1 (1/3)	32
図 38	SE031 出土遺物 2 (1/3)	33
図 39	SE031 出土遺物 3 (1/3)	34
図 40	土坑 (1/40)	35
図 41	SK023 出土遺物 (1/3)	36
図 42	不明遺構 (1/60・80)	37
図 43	不明遺構出土遺物 (1/1・2・3)	37
図 44	包含層出土遺物 1 (1/3)	38
図 45	包含層出土遺物 2 (1/2・3)	39
図 46	その他の出土遺物 1 (1/3)	40
図 47	その他の出土遺物 2 (1/2・3)	41
図 48	周辺調査区における古代の主要遺構	43
図 49	周辺調査区の鳥栖ローム層検出高	44

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市博多区竹下5丁目444における介護施設建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和2年12月15日付で受理した（事前審査番号2020-2-788）。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群に含まれていることから、令和3年1月19日に確認調査を実施した。その結果、現地表下95～110cmで明黄褐色の烏栖ローム層を検出し、その上面で遺構とそれに伴う遺物を確認した。この調査成果をもとに遺構の保全等に関して申請者と協議をおこなった結果、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。申請地1,497㎡のうち、調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響が及ぶ820.14㎡である。

その後、令和3年3月22日付で埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、同年4月19日から発掘調査を、令和4・5年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

2. 発掘調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：令和3年度 資料整理：令和4・5年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波正人

調査第1係長 本田浩二郎

庶務担当：文化財活用部文化財活用課

管理係 井手瑞江（令和3年度）

内藤愛（令和3～5年度）

事前審査：文化財活用部埋蔵文化財課

事前審査係長 田上勇一郎

山本晃平

調査担当：文化財活用部埋蔵文化財課

池田祐司 鶴来航介

3. 立地と歴史的環境

那珂遺跡群の所在する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に向かって開口する博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込み、両河川の間には観音山や牛頭から派生して断続的に長くのびる更新世台地が形成されている。春日原丘陵と総称されるこの更新世台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と烏栖ローム層が堆積している。丘陵は奴国王の王墓地とされる須玖岡本遺跡から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連続し複合的に展開している。なかでも弥生時代から古代にかけて、遺構密度が非常に高い。

那珂遺跡群は、この春日原丘陵の北部に位置し、比恵遺跡群と連続して同じ丘陵上に立地しており、その東には御笠川が、西には那珂川が北流しており、丘陵の裾部には両河が削り出した開析谷が幾筋も彎入する。那珂遺跡群は、この南北に長く連なる比恵・那珂遺跡群の南半部に位置し、比恵遺跡群とは浅い鞍部を境として便宜的に呼び分けている。

この丘陵中央部の尾根線上の最高所には、福岡平野で最古期の前方後円墳である那珂八幡古墳があり、その北西には東光寺剣塚古墳が、また南西部には前方後円墳や円墳群が広がっている。この尾根



1. 那珂遺跡群 2. 比恵遺跡群 3. 山王遺跡 4. 東比恵三丁目遺跡 5. 上牟田遺跡 6. 席田平尾遺跡
7. 下月隈D遺跡 8. 雀居遺跡 9. 久保園遺跡 10. 席田大谷遺跡 11. 宝満尾遺跡 12. 東那珂遺跡
13. 那珂君休遺跡 14. 板付遺跡 15. 高知遺跡 16. 下月隈C遺跡 17. 立花寺遺跡 18. 板付東遺跡
19. 麦野A遺跡 20. 麦野B遺跡 21. 三筑遺跡 22. 笹原遺跡 23. 諸岡B遺跡 24. 諸岡A遺跡
25. 五十川遺跡 26. 井尻A遺跡 27. 井尻B遺跡 28. 井尻C遺跡 29. 横手遺跡 30. 三宅C遺跡
31. 大橋E遺跡 32. 三宅B遺跡 33. 和田A遺跡 34. 和田田蔵池遺跡 35. 三宅遺跡群 36. 大橋A遺跡
37. 野間B遺跡 38. 美野島遺跡

図1 遺跡分布図 (S=1/25,000)

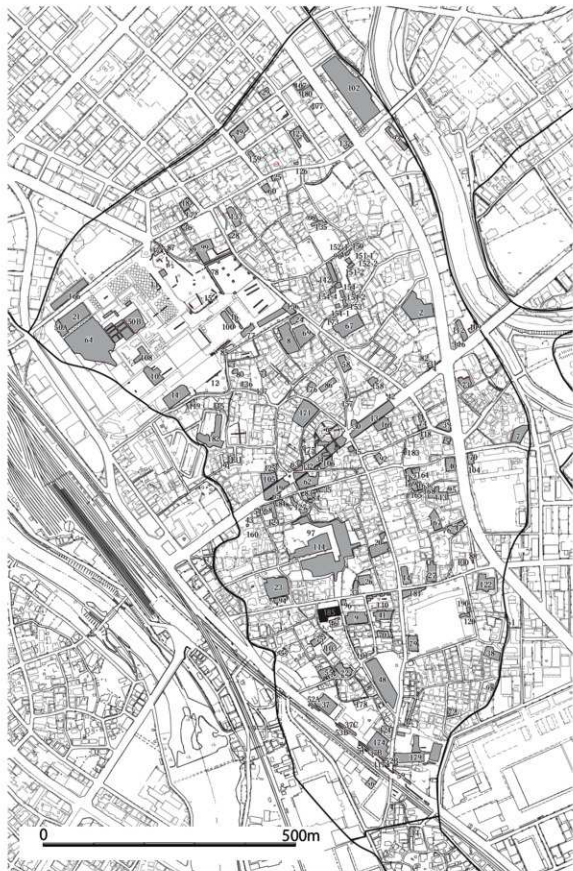


图2 那珂遺跡群全体図 (S= 1 / 7,500)

線を境として丘陵は東西にむかって緩やかに傾斜し、その間には可耕地としての低湿地帯が広がり、裾野には両河川による細長い開析谷が幾筋も彎入している。

比恵・那珂遺跡群はこれまでに計196次の調査を重ねており、各時代の集落や墳墓地の様相が次第に判明してきている。遺跡じたいは旧石器時代から人間活動が確認され、ナイフ形石器や彫器、剥片などが出土するものの分布は散漫である。縄文時代には石鏃や石匙、土器などが得られるものの、遺構にともなう事例を欠き、土地利用の具体的な解明には程遠い。この様相は比恵遺跡群でも同様と言える。

弥生時代に入ると、台地の縁辺部を中心に竪穴建物や貯蔵穴群などの遺構が広がり、開析谷に而した緩斜面には土器や石器、木器をともなう包含層が形成される。集落域は尾根上へと次第に拡大する。37次調査では、台地の南西縁で夜白式期から前期前半の二重環濠が発見された。また中央部の尾根上でも貯蔵穴をともなう環濠集落が営まれ、北西縁のアサヒビル工場内や東縁部にも貯蔵穴群がひろがるのが確認されている。前期後半から中期になると集落域は、縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。比恵遺跡群も同様に集落域の拡大傾向が見て取れる。

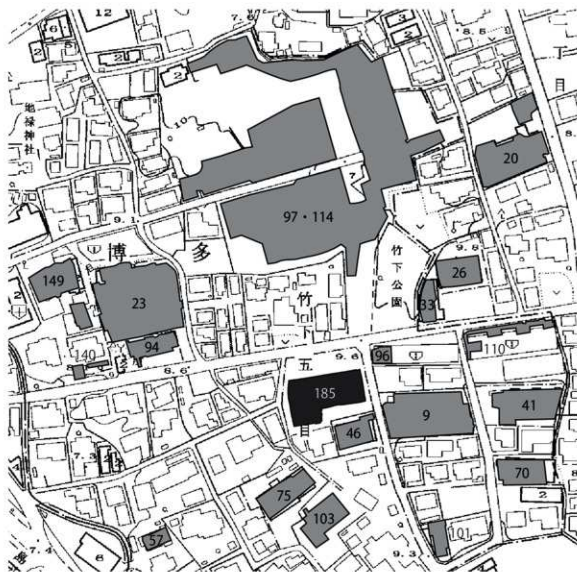


図3 185次調査地点の位置 (S=1/2,000)

中期後半から後期には台地の広範囲に集落域が拡大していく。なかには銅剣や銅矛など青銅器の鋳造関連遺物もふくまれており、青銅器の生産に携わる工人集団の工房群が台地の尾根上に存在したことがうかがえる。また集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする甕棺墓群が造営され、遺跡の性格も多様化する。比恵遺跡群の中央部でおこなわれた6次調査では、細形銅剣を副葬する甕棺墓が出現し、遺物も銅製鋤先や鍛造鉄斧などの金属器や各種木製農具、建築部材、漆製品など多様な遺物が出土している。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が造営され、主体部の木棺内に三角縁神獣鏡や玉類が副葬されていた。5世紀には遺構が顕著に減少して集落の断絶がうかがえるが、6世紀後半には那珂八幡古墳周辺の台地上に東光寺剣塚古墳と剣塚北古墳の2基の前方後円墳のほか前方後墳が造営される。このうち東光寺剣塚古墳は、全長140mで三重の周溝をもつ墳前地域で最大級の前方後円墳である。古墳の築造と軌を一にして那珂遺跡群の遺構も増加に転じて集落が広く展開する。規格性の高い3本柱の櫓列に圍繞された大型建物群が比恵遺跡群の北西部（8・72・109次調査）や中央部（7・13次調査）で見つかっており、記紀にみえる「那津官家」との関連が注目される。

7世紀になると大型建物群や初期瓦、これらを圍繞する区画溝など、公的施設の性格を示す遺構群が相次いで形成される。とくに遺跡群の南部では大規模区画が集中しており、比恵遺跡群の様相を継承するような消長をみせる。『日本書紀』の記事には「筑紫大宰」が対外的な役割を担ったことが記されており、これらの遺構群と関連付ける見解もある。8世紀には南からのびる官道が通り、新たに区画溝が掘削されるなど土地利用が継続する。瓦葺きの建物も点在しており、郡衙との関連も注目される。

中世においても区画溝をともなう居館遺構が確認されており、長期にわたって那珂遺跡群が地域の中心的役割を担ったことがうかがえる。

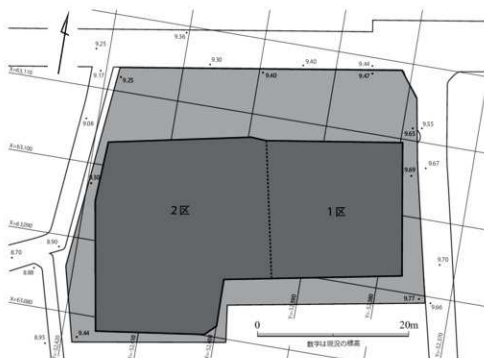


図4 調査区位置図 (S=1/500)



遺構のスケッチ

10m

図5 遺構配置図 (S=1/150)

Ⅱ. 調査の記録

1. 調査の概要と経過

本調査区是那珂遺跡群の南部に位置する。調査区周辺は敷地の北側に所在する那珂中央公園を頂点とした緩やかな小丘陵を形成する。丘陵は南北方向へ尾根状に広がり、浅い谷を挟んだ北側で那珂八幡古墳と向かい合う。尾根上では高い密度で遺構を確認しており、北側の114次、東側の9・96次、南側の46・75次調査で旧石器時代から中世までの遺構や遺物を確認している。

発掘調査以前の当該地は駐車場として利用されていた。調査地点の現況は比較的なだらかであるが、東から西に向かって緩やかに低く傾斜する。調査区北東隅の現地表面はおおよそ標高9.5mであるのに対して、北西隅では9.2m程度である。敷地南側では東西約50mで80cmほどの比高差を測り、若干の起伏をともなう地形と言ってよい。敷地面積は1,497㎡、調査面積は850.04㎡となった。

発掘調査は令和3（2021）年4月19日に重機による表土掘削と条件整備に着手し、翌20日から作業員を投入して遺構検出を開始した。当初は排土の都合により3転での調査を想定したが、結果的には東側を1区、西側を2区とした2転調査となった。7月31日には近隣住民を主な対象とした現地説明会を開催し、感嘆の声を多くいただいた。8月10日に調査区の埋戻しをおこない、調査は無事に終了した。

遺構は掘立柱建物11棟、竪穴建物1棟、溝11条、井戸1基、その他ピット多数などを検出し、遺物はコンテナ35箱を数える。

2. 土層

調査区壁面の土層観察は、北壁面、東壁面、西壁面、および南壁面の西半部についておこなった。現代の整地土が部分的に深く掘り込むことを除けば各層位に大きな乱れはなく、おおむね水平な整層をなしている。

壁面土層は大きく6層に区分することができる。1層は現代の整地土で、バラスや拳大の礫などが多量に混じる。4～5層程度に細分できる。2層は近代から現代の旧耕作土で灰オリーブ～褐色灰色。

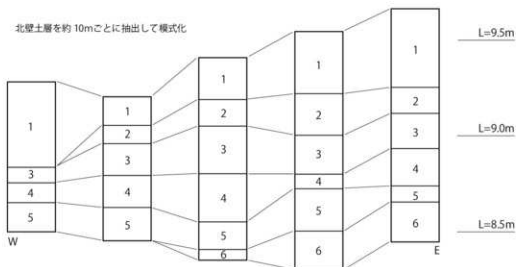


図6 土層模式図

3層は黄褐色砂層で粗砂を多くふくむ。古代から中世の遺物をふくむ。4層も黄褐色砂層だが3層に比べて粘性が強く、砂の含有量は少ない。中世白磁などの遺物を包含している。5層は暗赤褐色～茶褐色の細粒砂層。しまりが弱く地山面との層界に凹凸がみられる。8世紀までの遺物がふくまれる。6層は黒褐色～暗赤灰色土。調査区北東部の限られた範囲に堆積しており、出土遺物は弥生土器を主体とする。出土遺物をふまえると、各層位の堆積時期は、1層＝現代、2層＝近代～現代、3層・4層＝中世、5層＝8世紀ごろ、6層＝弥生時代か、と想定される。

1区の表土掘削をおこなった際には、鳥栖ローム層を検出面としたが、調査区北側で6層の広がりを確認したことから、6層を残しながら5層以上を除去した。その後、1区の調査を進めるなかで5層の上面から掘り込む遺構を認識し、西側の2区における表土掘削の際には5層上面での遺構検出を試みたが、結局遺構の存在を視認し得なかったため、5層についても重機で掘削している。なお6層の堆積は調査区北東部に限られたことから、2区では鳥栖ローム層を遺構検出面として設定した。

遺構面は現地表下0.9～1.2mで確認した。深度の差は地表面の傾斜に起因するもので、遺構面の標高は調査区全体で8.5m程度とおおむね水平であり、現在の地形に現れる起伏はみられない。ところが南隣の46次調査では標高8.7～9.0mで鳥栖ローム層を検出しており、南へ向かう高まりをみせる。また東西を軸にとると、46次西端のローム層上面は8.7mであるが、東端では9.0mとなり、さらにその東側の9次調査では最高点で9.8m程度にまで達する。一方で遺構の密度は東側ほど薄い傾向にあり、上述の様相が往時の自然地形をそのまま反映するとは断定しがたい。この問題については後段であらためて整理して検討する。

3. 掘立柱建物 (SB)

SB038 (図7、PL 2-1)

調査区東端で全景撮影後の土層観察中に確認した。8世紀の包含層の上から掘り込まれた3基のビットがSD001の肩部を掘り込む。建物の軸方向はN-9°-W。東へ展開するとみられ、北側へさらに広がる可能性もある。柱間長は約1.1mで両端の柱間で約2.3mと小規模である。柱穴は円形ないしは楕円形で長径0.4～0.5m。検出面からの深さは中央のSP1090で最も深く約0.6m、最も浅い北側のSP1089で約0.4mである。いずれも柱痕は観察されていない。

出土遺物は土師器の甕。包含層との層序関係から時期は9世紀以降と考えられる。

SB039 (図7、PL 2-2)

調査区東側で検出した。東辺のビットはSD002の埋没後に掘り込み、西辺の2箇所は他の遺構と重複するため確認できなかった。建物の長軸方向はN-15°-W。2間×1間の南北建物。梁行は約2.3m。桁行は約4.4mで柱間は芯々で約2.2mとなる。床面積は約10.1㎡。柱穴底面は標高8.1～8.3mの範囲に収まり、径0.3mほどのものが多い。

出土遺物は土師器、須恵器。時期は7世紀末以降である。

SB040 (図7、PL 2-3)

調査区南東部に位置する2間×2間以上の側柱建物。主軸方向はN-17°-W。梁行は約3.0mで柱間は約1.5m。桁行は約3.1mで柱間は約1.6m。床面積は9.3㎡以上。東辺の柱穴底面は標高8.4m前後であるのに対して、西辺は8.2m前後と深い。西南部のSP1088を南壁土層で観察したところ、8世紀に形成された包含層よりも上から掘削されている。南北にはさらに柱穴が続く可能性がある。

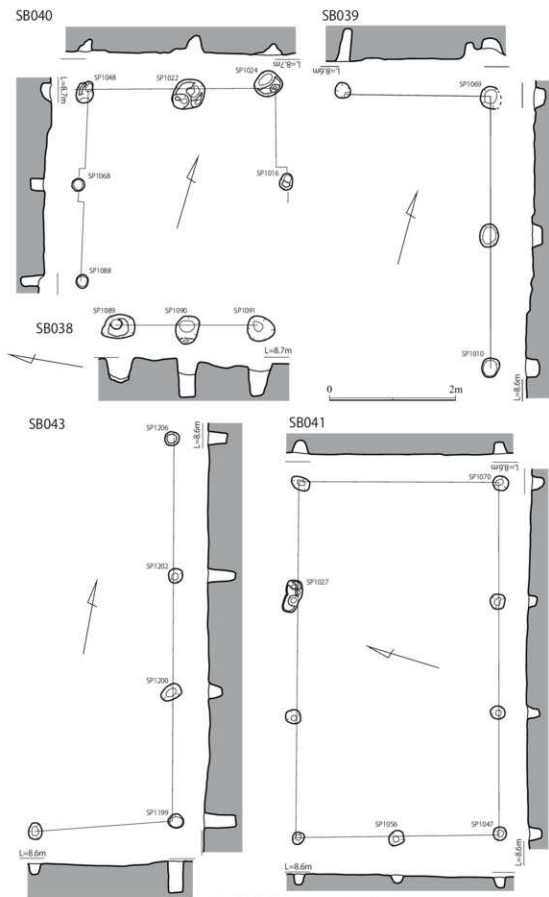


图7 掘立柱建物 1 (S= 1 / 60)

出土遺物は土師器、須恵器、カマド。平安時代までの遺物をふくむ。

SB041 (図7、PL 2-4)

調査区中央に位置する2間×3間の側柱建物。主軸方向はN-17°-W。梁行は約3.2mで柱間は約1.6m。桁行は約5.6mで柱間は約1.9m。床面積は約17.9㎡。柱穴底面はおおよそ標高8.4m前後で径0.2m程度。

出土遺物は弥生土器、土師器。古代の遺物が主体である。

SB042 (図8、PL 2-5)

調査区西側に位置する。2間×3間の側柱建物。主軸方向はN-14°-W。梁行は約3.9mで柱間は約2.0m。桁行は約6.0mで柱間は約2.0m。床面積は約23.4㎡。柱穴底面は標高8.3～8.4m程度が主体となり、径0.2m程度。

出土遺物は土師器、黒色土器、須恵器。平安時代までの遺物をふくむ。

SB043 (図7、PL 2-5)

調査区西端で検出した。1間以上×3間の建物。調査区の西へ続いており、南北方向を主軸とみれば、方向はN-11°-W。梁行の柱間は約2.3m。桁行は約6.1mで柱間は約2.0m。床面積は14.0㎡以上。柱穴径はいずれも約0.2mで揃うが、底面は標高8.1～8.4mほどの間でバラつきがみられる。

出土遺物は平安時代とみられる土師器の皿。

SB045 (図8)

調査区中央北側に位置する1間×2間の掘立柱建物。主軸方向はN-55°-W。梁行は約1.45m。桁行は約3.2mで柱間は約1.6mとなる。床面積は約4.6㎡。柱穴底面は標高8.3m前後で、いずれも径約0.3mである。北東隅の柱穴は攪乱によって消滅している。弥生時代の溝SD033に切られる。

出土遺物は弥生土器のみであり、切り合いをふまえると弥生時代の遺構であろう。

SB046 (図8)

調査区中央北側に位置する1間×2間の掘立柱建物。主軸方向はN-63°-W。梁行は約2.0m。桁行は約3.8mで柱間は約1.9mとなる。床面積は約7.7㎡。柱穴底面は標高8.3～8.4m程度で、径0.3m前後を測る。南東隅の柱穴はSD024と重複しており確認できなかった。

出土遺物は土師器、須恵器環蓋。8世紀前半までの遺物をふくむ。

SB047 (図8)

調査区南西部で検出した2間×2間以上の側柱建物。南北方向を主軸とみれば、主軸方向はN-28°-W。梁行は約3.6mで柱間は約1.8m。桁行は約3.7mで柱間は約1.85mとなる。南側へさらに1間広がる可能性もあるが、SD001をすでに掘削しており検証できなかった。床面積は13.3㎡以上。柱穴底面は標高8.4m前後となる。南西隅の柱穴はSD026の埋没後に掘削されている。南東隅の柱穴は確認できなかった。

出土遺物は土師器、須恵器甕。時期は8世紀以降。

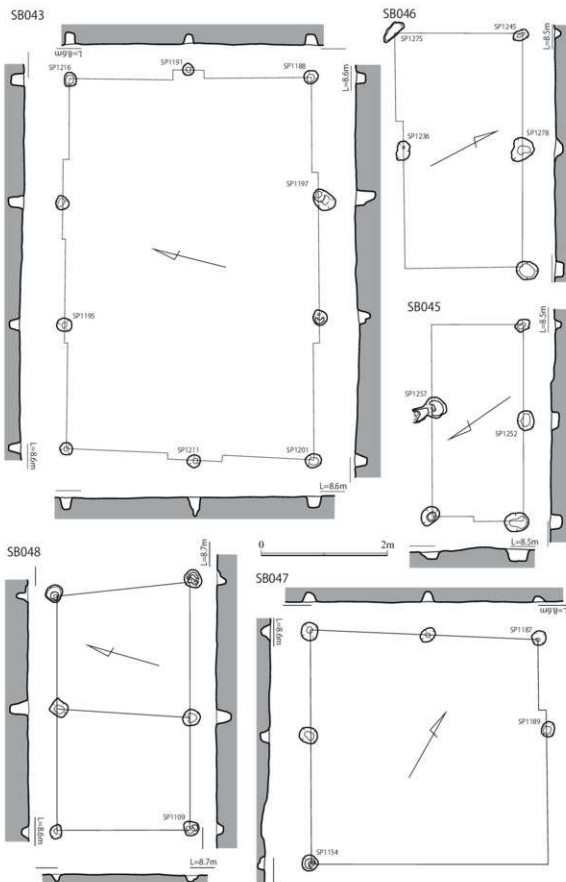


图8 掘立柱建物2 (S= 1 / 60)

SB048 (図8)

調査区南西部で検出した1間×2間の掘立柱建物。東西建物で主軸方向はN-75°-E。梁行は約2.1m。桁行は約4.0mで柱間は約2.0mだが、北辺ではやや短小になる。床面積は約8.4㎡。柱穴床面は標高8.4～8.5m程度で径約0.2m。出土遺物は土師器のみで古代から中世の遺構か。

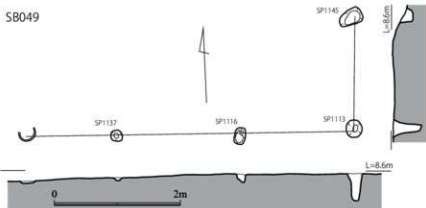


図9 掘立柱建物3 (S= 1 / 60)

SB049 (図9)

1間以上×3間以上の側柱建物。主軸方向はN-89°-Eで長軸が正方位に対してほぼ直交する。梁行は約1.8m。桁行は約5.2mで柱間は約1.7mとなる。柱穴床面は標高8.3～8.4mとなるが、南東隅のSP1113のみ約8.1mと深い。北側はSD001と重複しており、すでに掘削が進んでしまったためほとんど柱穴を確認できなかった。柱穴径は0.2m程度の小規模なものがほとんどである。

出土遺物は土師器皿、須恵器甕。時期は8世紀以降。

4. 竪穴建物 (SC)

SC035 (図10, PL.2-6)

竪穴建物はSC035の1棟が見つかった。SC035は調査区中央南端に位置し、遺構の南半部は調査区外へ広がっている。南西辺は未検出ながら1辺2m程度の方形のプランが予想される。検出面から床面までの深さは16cmで埋土は暗灰黄色粘質土の単層。全体に張り床を施しており、厚い箇所10cmに達する。主柱穴や壁溝など建物の付帯施設は確認できていないが、内部のピットから弥生土器の大型壺口縁部(1)が出土している。口径は50cmを超えるが正確な法量は不明。口縁部は一段分厚く作り出し、端部に向かってさらに肥厚する。端部には板状工具による斜線文を施す。外面は縦ハケで調整する。にぶい黄褐色。

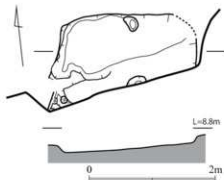


図10 SC035 (S= 1 / 60)

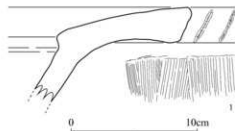


図11 SC035出土遺物 (S= 1 / 3)

5. 溝 (SD)

SD001 (図 12・13, PL. 3・4)

南北 16.8 m、東西 39.8 m にわたって検出した溝である。調査区東側の 1 区東端を南北に走り、同南東隅で西へ直角に折れて東西方向となり、一部が調査区外へ張り出し、調査区西側 2 区の南端を通して調査区外の西側へ続いていく。屈折部は調査区を拡張して検出しており最外部は未確認であるが、内側の肩部が南北方向から東西方向へ連続することから、一連の溝であると結論づけた。調査時にはすべて SD001 と呼称して 1 区と 2 区で区別し、遺物整理作業もその区分を踏襲したが、今回の報告ではより簡便に記載するために、1 区の南北方向を SD001-1、2 区の東西方向を SD001-2 と表記する。なお出土遺物は両者を一括して掲載する。

SD001-1 は検出幅約 2 m、底部幅 0.3 ~ 0.8 m で、断面は逆台形をなす。13 度西偏。底面の標高は調査区北端で 7.9 ~ 8.0 m、南端の屈曲部で 8.1 m であるが、計測地点による偏差が大きく、南北方向の傾斜は読み取れない。検出面からの深さは西側肩部を基準とすると 0.4 m である。東側の立ち上がりは確認できるものの、肩部は大半が調査区外にあたる。ただし、調査区の中ほどで上層から切り込む SP1089 ~ 1091 の掘削にあたって一部を東へ拡張したところ、東側肩部は標高 8.7 ~ 8.8 m となり、西側肩部の 8.2 ~ 8.5 m と比べて数十 cm ほど高まることが判明した。西側肩部は SD002 の東側肩でもあり、本来よりは若干削られているが、それでも周辺の検出高と比較しても東側肩部の標高は高い。底面に

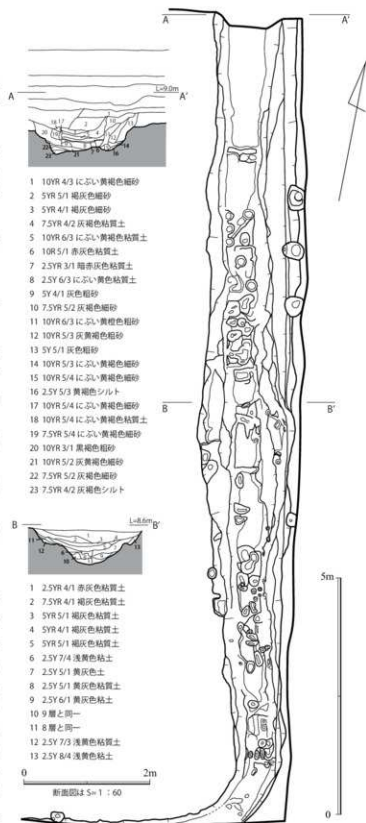


図 12 SD001-1 (S= 1 / 80)

は 10 ～ 20cm 程度の浅いくぼみが多数生じており起伏に富む。人間や禽獣の足跡と思われる痕跡は確認できない。屈曲部は底部幅 0.5 m で底面は比較的なだらかであり、深さは北側と大きく変わらない。埋土は灰褐色で、北壁土層で再掘削と思われる掘り込みが観察される。調査区の中ほどで、床面から 20cm の高さでほぼ完形の提瓶が横位で出土している。

SD001-2 は検出幅約 3 m、底部幅 0.3 ～ 0.4 m。断面は逆台形。77 度東偏しており、SD001-1 とは直交する。底面は標高 7.8 ～ 7.9 m で東西方向の傾斜はみられない。検出面と底面の比高差は 0.6m 程度で、南側肩部は北側肩部よりも 10cm ほど高い。ただし東側では浅い溝 SD036 の影響を受けている。SD001-1 と比べて底面は平坦だが局所的な凹凸はみとめられる。西側は SD022 に切られる。東側の肩部には浅い掘り込みである SK023 が形成され、弥生土器が潰れた状態で埋没していた。SD001-2 の埋土は灰褐色で、西側で 3 層に分けて遺物を取り上げ、地点によっては上層をさらに上層 1・2 と細分した。遺物は上層に多く、とくに西側では検出から段下げの段階で須恵器や土師器が東西 5 m にわたって面的に広がる。須恵器が南から北へ傾斜しながら堆積し、その上に土師器が重なっていた。出土状況から、南から土師器が投棄された可能性がある。出土地点のやや離れた土器が接合するため、遺物の廃棄後に若干の移動をともなうものの、付近では口縁を一部欠いただけの平瓶が出土しており、廃棄地点はそれほど離れていないだろう。後述する 114 次調査 SD-2040 では弥生時代の甕棺に須恵器を供えた状態で埋没しており、SD001-1 にもほぼ完形の提瓶がともなうことから、全体として機能段階から埋没までに大きな攪拌は受けていないとみられる。

出土遺物は土師器、須恵器、移動式カマド、瓦、鴟尾などのほか、少量の弥生土器など。図 14 ～ 21 は上層 1 および所属層位の不明な遺物である。SD001-1 出土遺物は一部を除いて分層をおこなっていないため、主にここに掲載し、該当遺物の番号に*を付す。2 は弥生土器の甕棺の口縁部である。口

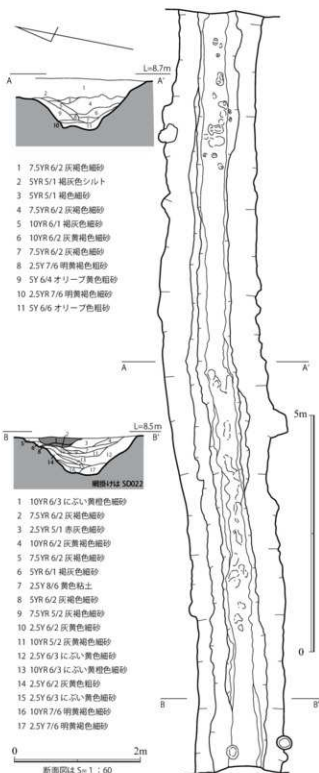


図 13 SD001-2 (S= 1 / 80)

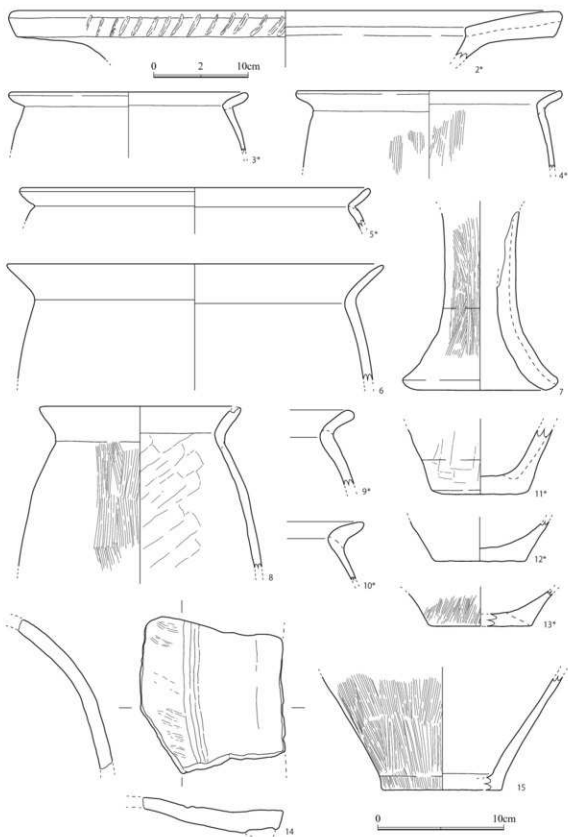


图 14 SD001 出土遺物 1 (S= 1 / 3 · 4)

径 58.5cm。口縁部はほぼ水平に張り出すが、内側のほうがやや低く傾く。口縁端部の厚みは 2.8cm に達し、端部にはヘラ状工具で約 2cm の間隔で刻目を施す。3～5 は弥生土器の甕。3 は口縁部がく字形で、頸部が強く屈折する。内外面ともに口縁部はナデ、胴部は縦ハケ。胴部の張りは弱い。胎土に 1mm 大の白色鉱物が混じる。4 の口縁部はく字形を呈し、胴部は縦ハケ。胴部の張りは弱い。胎土に 1mm 大の白色鉱物が混じる。5 は弥生土器の高環。胴部から底部へは喇叭状に広がる。外面は縦ハケ、内面はナデ調整をおこなう。6 は土師器の甕。胴部の張りは弱く、口縁部がく字形を呈する。口縁部はナデ調整を施し、胴部内面はケズリ、外面は縦ハケで整形する。口縁端部は内面が剥落する。7～10 は弥生土器の甕で、小片のため口径は不明。口縁部がく字形に屈折しており胴部はやや張る。11～13・15 は弥生土器の甕の底部である。11 は外面を板状工具で掻きとり、内面には指押さえの痕跡が残る。15 は平底で胴部に向かって直線気味に開き、外面は縦ハケで底部まで調整する。14 は鴟尾の頭部か。端部が遺存しており、破損部に向かって径をやや広げる。端部の屈曲率はおおむね一定で口径 34.0cm に還元され、頭部上面にあたる。端部から 5cm ほど離れて外面に 2 条の沈線をめぐらせる。端部内面は剥離する。胎土は赤橙色で焼成は軟質である。16～19 は土師器の甕である。16 は外反

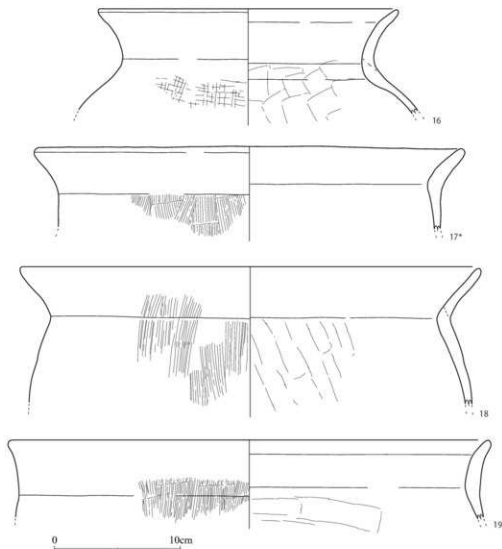


図 15 SD001 出土遺物 2 (S= 1 / 3)

しながら口縁部が開く。口縁部はナデ調整、胴部外面は格子状のタタキ、胴部内面は縦ハケと横ハケが混在する。17は胴部がほとんど遺存しないが張りは弱い。口縁部は内外面ともにナデ調整、胴部外面は縦ハケを施す。18はく字形口縁で端部はナデ調整、頸部外面は縦ハケ、内面はケズリを施す。19は口縁部がわずかに外反している。口縁端部はナデ調整、外面は縦ハケ、内面はケズリをおこなう。20～33は須恵器の甕。20は胴部最大径 65.5cm。SD001-2 の段下げの際に広範囲に散布していた破片が接合した。外面は格子目タタキ、内面は当て具痕が残る。21は口縁端部を肥厚させて沈線を1条めぐらせる。23は20と同様にSD001-2の上層に破片が広がった状態で検出した。24は2～3条1組の沈線を2段にわたって施し、その間を波状文で充填する。25は口縁端部に返りを作り出し、外面には沈線を多条にめぐらせたうえで斜線文を施す。26は口縁部の直下に斜線文を密に施し、これを2条の直線文により区画する。27は口縁端部を下方につまみ出して肥厚させて、中ほどに沈線を一条加える。口縁部外面には波状文を施し、内面は横方向のケズリで調整する。34は須恵器の鉢、底部はレンズ底気味の平底である。立ち上がりは垂直に近く、口縁部のあたりでやや膨らみをもつ。内外面ともにナデ調整。35～42は坏蓋、43～53は坏身である。42・53は土師器、その他はすべて須恵器。35～38は厚みのあるつまみが付く。39は内外面ともにナデ調整で天面にヘラ記

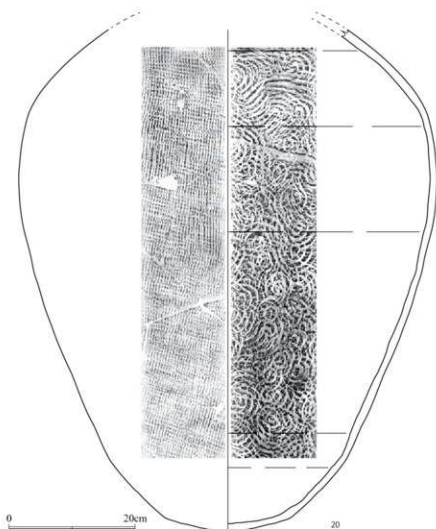


図16 SD001出土遺物3 (S=1/6)

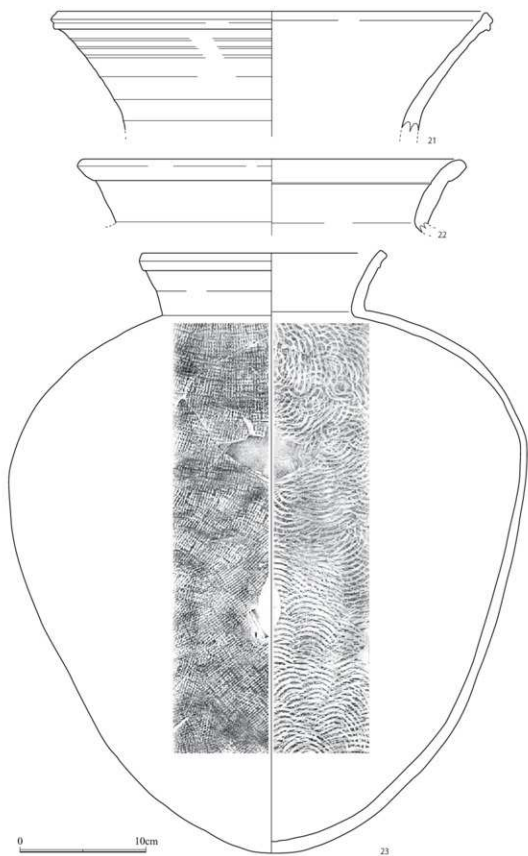


图 17 SD001 出土遺物 4 (S= 1 / 3)

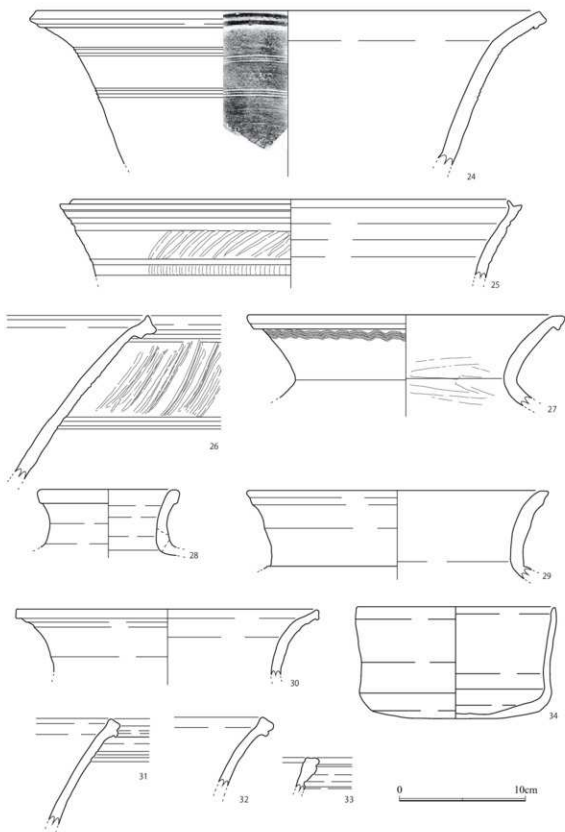


图 18 SD001 出土遺物 5 (S= 1 / 3)

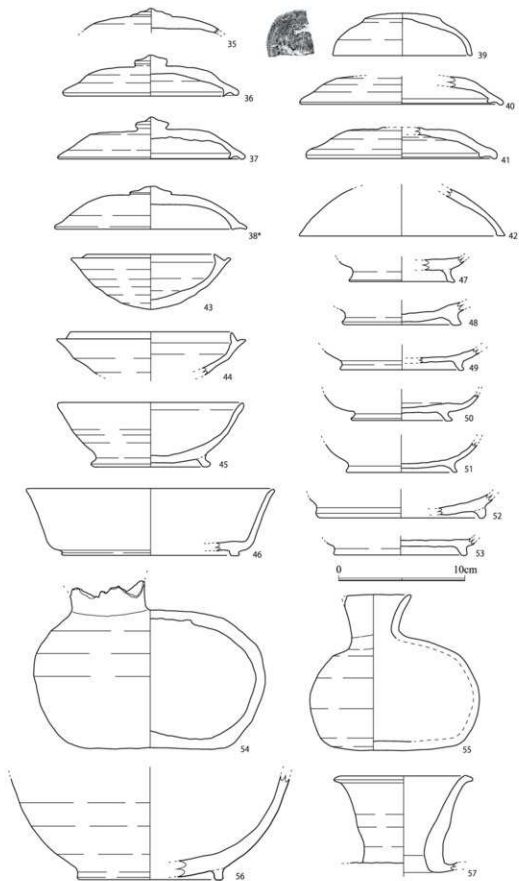


图 19 SD001 出土遺物 6 (S= 1 / 3)

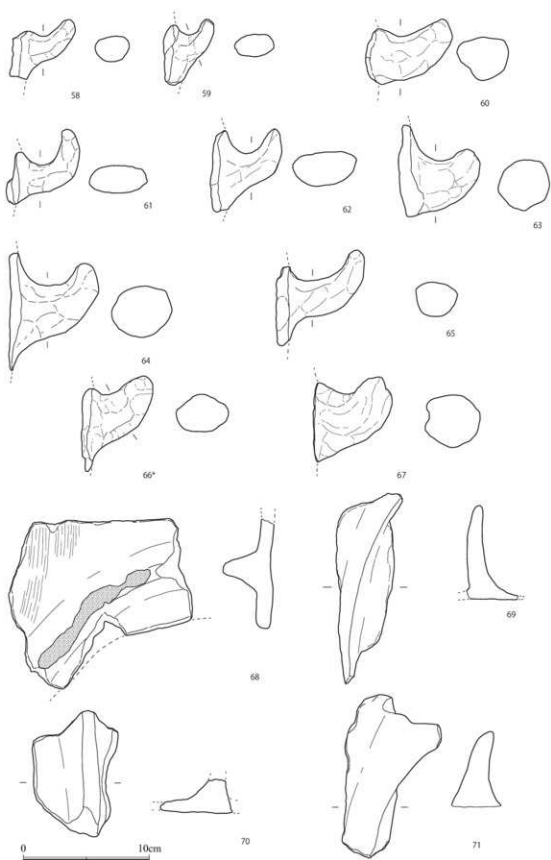


图20 SD001 出土遺物7 (S= 1 / 3)

号を施す。42は土師器の坯蓋で、内湾気味に立ち上がる。端部は面取り。色調は橙色。43は底面に平行する3条の線刻を施す。50は底面に「×」形のへら記号。53は土師器で外面底部にへら成形にともなう痕跡が同心円状に形成される。54・55は須恵器の平瓶である。54は最大径18.3cm。胴部上面にコンパス様の工具で割り付けたような二重細線の正円形が描かれる。同じ部位の内面側には円形のへこみが生成しており、棒状工具を押し当てたような痕跡とみられる。実際の頸部は割り付円から半個分ずれた位置に作り出しており、製作にともなう痕跡であろう。内面全体は横ナデ成形。55は口径5.2cm、頸部径3.8cm、胴部径13.4cm。胴部は球がつぶれたような形状を呈し、その中心をやや外した位置に喇叭状の口縁部を取り付ける。胴部外面はケズリ。56は須恵器の鉢か。球状の胴部に低い高台が取り付く。胴部外面はケズリ、同内面および底部外面はナデ調整。57は須恵器の甕である。口縁端部をわずかに折り返して外側へ開く。58～67は土師器の甕の把手である。断面形態は円形または楕円形。68～71は移動式カマドの底である。49は残存長14.6cm、最大厚3.8cm、内面にケズリ、外面にハケ成形をおこなう。69は残存長15.7cm。屈曲部にあたり、緩やかな弧を描く。底も体部から内湾気味に立ち上がる。色調は72～74は丸瓦。72は残存幅11.4cm、残存長4.0cm。両端部はケズリ、凹面には布目圧痕がみられる。須恵質で焼成良好。73は最大長8.3cm。凹面に布目圧痕、凸面にケズリを残す。須恵質で焼成は良好。色調は灰色。74は残存長10.9cm、残存幅9.5cm、最大厚1.7cm。須恵質でよく焼成されており、胎土に1～2mmの石英をふくむ。長軸方向には両端を損傷するが、一方は内面側から斜行する。短軸方向の端部は刀子のような工具で裁断している。凹面側に幅2cmの板状模骨痕が4条みとめられ、一部に布目圧痕が残る。75は甕の底部か。残存長8.5cm、最大幅2.2cm。横断面は方形に近いが、角の稜は比較的弱く丸みを帯びる。側部は一部がやや強い赤みを帯びる。橙色。76・77は土器に取りつく脚か。76は全長8.0cm、最大幅2.8cm。断面楕円形で一方の端部には押圧によるへこみが生じ、端部が黒化する。77は円筒形で全長8.1cm、直径2.9cm。一方の端部には黒斑が形成される。形態的に76と類似する。78は石鏃である。残存長2.8cm、残存幅2.1cm、重量1.6g。凹基。側縁は直線的に刺離調整する。黒曜石裂。79は石匙か。

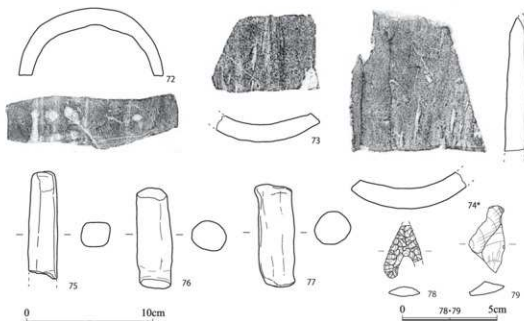


図21 SDO01出土遺物8 (S=1/2・3)

刃部を折損する。黒曜石。

80～93は上層2出土遺物である。80は弥生土器の甕。く字状口縁で胴部の張りは弱い。81は土師器の鉢である。外面にスガが吸着する。82は土師器の小型壺。色調は黒褐色。83は須恵器の甕の口縁部から頸部である。口縁部は喇叭状に開く。内外面ともにナデ調整で、胴部内面に当て具痕。84は須恵器の坏身である。高台は外側へわずかに開き、端部をつまみ出す。底面に線刻あり。85は須恵器の坏蓋。外面頂部をヘラケズリで調整するほかは内外面ともにナデ。87は須恵器の坏蓋である。内面に製作時のものとみられる融解した鉱物が付着している。焼成は良好で色調は灰色。86は須恵器の坏身で外面底部のみヘラケズリ、その他はナデ調整。底面に平行する3条の線刻がみられる。90は土師器の高坏である。脚部の器厚は最大で1.3cmになるが、中空のまま坏部に達する。色調は赤橙色。91は甕の把手。把手断面はやや潰れた円形。92は白玉。最大径1.2cm。滑石製。93は丸瓦である。残存長12.2cm、残存幅9.3cm、最大厚1.7cm。凹面に板状の模様痕がみられ、その上に布目圧痕が形成される。須恵質で焼成は良好。色調は灰色。

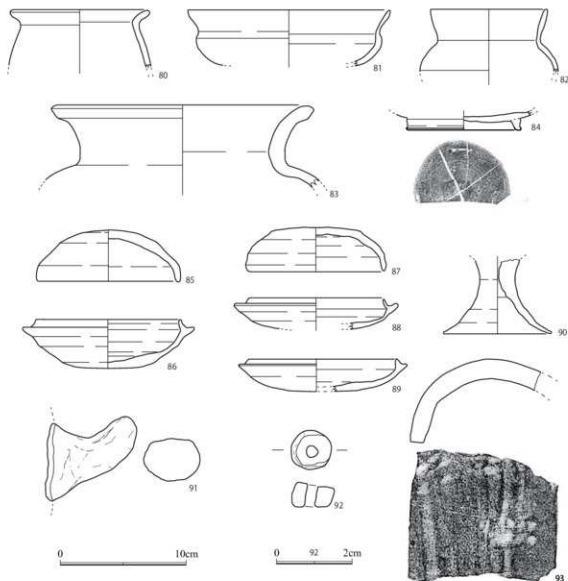


図22 SD001 上層2出土遺物 (S= 1 / 1・3)

94～106は中層および下層の出土遺物である。94と98のみ下層で残りは中層。94は弥生土器の甕である。頸部から口縁部はほぼ水平に短く開く。外面はナデ調整を施し、口縁部外面側にススが吸着する。95は土師器の甕。口頸部は短くやや外反する。外面は縦ハケ、内面はケズリで調整する。96は土師器の甕である。口縁部は喇叭状に開き、端部は丸く肥厚する。97は土師器の鉢である。外面にハケメが疎らにみられる。98は土師器の高環。内外面ともに赤色顔料を塗布しており、とくに環部内面に濃くみられる。脚部内面にも少量ながら付着している。99・100は須恵器の甕である。99は胴部最大径が胴部中央よりやや高く、おおむね最大径の位置で穿孔を施す。胴部外面はヘラケ

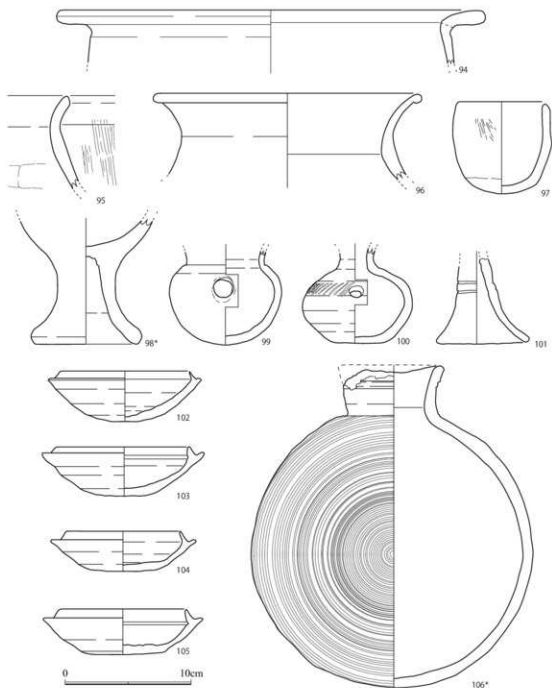


図23 SD001 中層・下層出土遺物 (S= 1 / 3)

ズリで調整しており、頸部外面はナデ調整をおこなう。100は平底で線刻を施す。胴部上半に径1.2cmの穿孔を施し、同じ高さに斜線文を施す。ハケ工具で2～3mm間隔で施文する。胴部下半部にはヘラケズリ、頸部にはナデで調整する。102～105は須恵器の坏身。102は外面底部のみヘラケズリで、ほかはナデ調整。底面に矢印形の線刻を施す。103は底面に「×」状のヘラ記号を線刻する。104は外面底部のみヘラケズリでほかはナデ調整。底面にヘラ記号がみられる。106は須恵器の提瓶。胴部外面には同心円状の線状痕が形成される。胴部内面の痕跡から、横倒しの状態で胴部を製作したのちに口頸部を接合したと考えられる。

中層および上層2の出土遺物は7世紀中頃までに収まり、上層1では7世紀初頭から末ごろまでの遺物がみられる。したがって、SD001は7世紀中頃から後半にかけて埋没がすすみ、7世紀末にはほぼ完全に埋没したと考えられる。

SD002 (図24, PL.3)

調査区東側で検出した南北方向の溝である。南側は調査区南壁の手前で取束しており、北側は調査区外へ続く。主軸は11度西偏してSD001と平行関係にあるが、切り合いは確認されない。検出幅は0.6～0.8m、底部幅は0.3～0.6m。底面の標高は調査区北端で8.3m、南端で8.5mを測り、北へ向かって低く傾斜する。検出面からの深さは最大0.2m程度。底面はとくに北側において顕著な凹凸をなしており、並走するSD001-1の特徴と共通する。SD002の南端はSD001-1の屈曲部にあたり、かろうじて重ならない位置関係を保つことから、SD001-1と何らかの関係をもつ可能性がある。埋土は上層が黄褐～灰褐色、下層が黒褐色土。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器などコンテナ1箱程度。図化にたえる資料は得られなかったが、7世紀末ごろの環蓋が出土している。

SD012 (図25, PL.5-1)

調査区南東部で検出した東西方向の溝である。81度東偏しておりSD001-1およびSD002と直交し、SD001-2と平行する。東端は土手状に肩部が高まり、周辺の地山面よりも隆起する。西側はSD022と調査区内で重複するが、その範囲はごく狭小で埋土も浅いため、切り合いによる先後関係は不明。約8mの長さを検出している。検出幅0.3～0.8m、底部幅0.2～0.3m。底面の標高は東西両端において8.35mで若干の起伏をとまなう。検出面からの深さは0.2～0.3m。SD001-1が屈曲して西へのびている北側を2～20cmほどの間隔で並走しており、東端はSD001-1の屈曲部のすぐ西側に位置する。またSD002

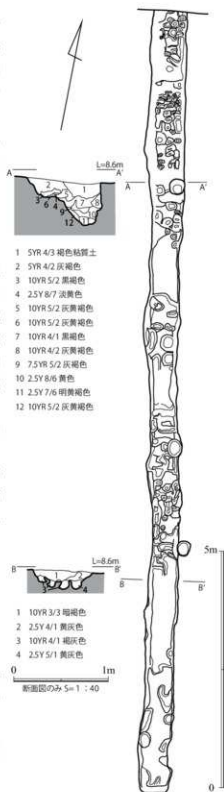


図24 SD002 (S=1/80)

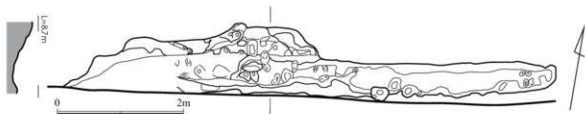


図 25 SD012 (S= 1 / 60)

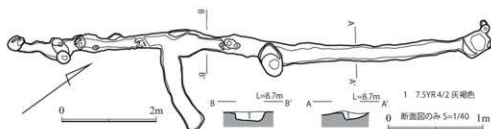


図 26 SD013 (S= 1 / 80)

とも 5 cm ほどのわずかな間隔を空けており、東端の立ち上がりが SD002 の東側肩部の延長線上にあたる。こうした位置関係に鑑みると、SD012 は SD002 や SD001-1 と関連する可能性があるものの、切り合いなど具体的な手掛かりを欠く。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器。107 は須恵器の壺か。口縁部は喇叭状に開き、内外面ともにナデ調整で仕上げられる。内面は自然釉により黄灰色を呈する。109 は須恵器の坏身。平底で直線的な線划がみられる。110 は返りの接合部をへらで溝を切る。113 は須恵器の皿。底部内面は中央にむかって若干隆起する形態と思われる。外面に黒褐色の自然釉がみられる。114 は移動式カマドの底部である。底部は平坦で体部を支えるため幅広に引き伸ばされる。

出土遺物から、7 世紀後半に埋没したと考えられる。

SD013 (図 26)

調査区東側で検出した溝である。北東から南西へのびており、主軸方向は 33 度東偏する。検出幅は 0.2 ~ 0.4 m。底面の標高は 8.6 m。検出面からの深さは 5 cm 程度で非常に浅い。中ほどで東へ 1.5 m 程度分岐するが規模は同程度。埋土は茶褐色。遺物は土師器、須恵器などの小片で時期は不明。

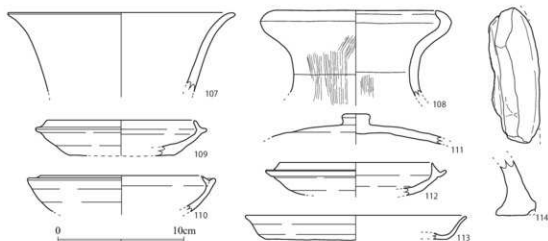


図 27 SD012・014 出土遺物 (S= 1 / 3)



図28 SD014 (S= 1 / 60)

SD014 (図28)

調査区北東部で検出した南北方向の溝である。主軸方向は11度西偏でSD001-1やSD002と平行する。北端の立ち上りを北壁付近で確認している。検出幅0.2～0.4m、底部幅0.2m。底面は標高8.5mで検出面からの深さは最大0.1mと非常に浅い。南北で底面高に比高差はなく、底面にはなだらかな凹凸がみられる。埋土は茶色。弥生土器の袋状口縁壺(108)が出土している。最大径15.1cm、頸部径9.8cm、残存高6.8cm。口縁端部をナデ調整しており、頸部は内外面ともに縦ハケ。胎土は橙色で2mm大石英をふくむ。

SD022 (図29, PL. 5-2)

調査区南側で検出した東西方向のびる溝である。1区調査時にはSD017と呼称したが、2区の調査を進める過程でSD022と同一であることが判明し遺構名を統一した。総延長29mを検出したが、東側は調査区南壁までの調査にとどまり、未掘部分がある。溝は西に向かって浅くなり、西壁付近で途切れている。全体として溝はクランク状に北側へ湾入しており、中央部はSD001と平行する。検出幅0.5～1.3m、底部幅0.2～0.5m。底面の深さは標高8.2～8.3mで傾斜はほとんどないが、西側のほうがわずかに高い。検出面からの深さは20～30cm。SD001・020・024・026・029と切り合い、いずれもSD022のほうが新しい。埋土は黄色砂で上下2層に区分して掘削した。遺物は上層に多く、下層にともなう遺物は少ない。

出土遺物は土師器、須恵器などコンテナ4箱分ほど。121のみ下層出土。115は須恵器甕の口縁部。口縁部は外反しながら開き、端部を丸く肥厚させる。116は須恵器の甕。口縁部は外反しながら開き、端部に三角形の突帯をめぐらせる。口縁部から頸部まで内外面ともにナデ調整で、胴部内面に当て具痕がみられる。117・118は土師器の坏蓋である。117は口縁端部に弱い返りがつく。内外面ともにナデ調整。118は口縁端部が鍵状に屈折する。内外面ともにナデ調整で仕上げる。119・120は土師器の碗である。119は平底で内外面ともにナデ調整。120は平底から直線的に立ち上がる。内外面ともにナデ調整。121～127は須恵器の坏身。128は須恵器の壺。胴部最大径および頸部で強く屈折し、体部が算盤玉状の形

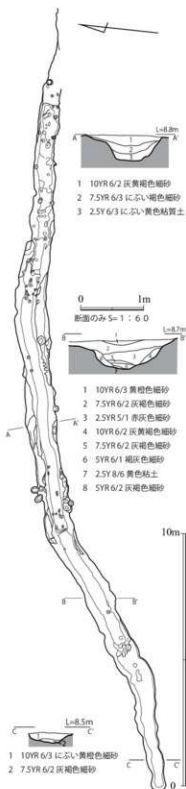


図29 SD022 (S= 1 / 150)

態をみせる。内外面ともにナデ調整。129は土師器の高環。坏部はやや内湾気味に大きく開き、端部でやや外反する。内外面ともにナデ調整。130は丸瓦。最大長14.6cm。凹面に布目圧痕、凸面にケズリを残す。須恵質で焼成は良好。131は丸瓦。残存長13.0cm。凹面に布目圧痕、凸面にハケメ痕を残す。須恵質で焼成はやや軟質。134は移動式カマドの庇。被熱によって表面に黒変や赤変の痕跡がみとめられる。132は土師器の甕の把手である。胎土はにぶい黄橙色で最大3mmの石英が混じる。133は磨り石である。長径9.9cm、短径8.1cm。火成岩だが具体的な石材は不明。全体に表面の磨滅が著しく、主に長径方向の運動を反映したものと考えられる。135は須恵器の甕。残存高

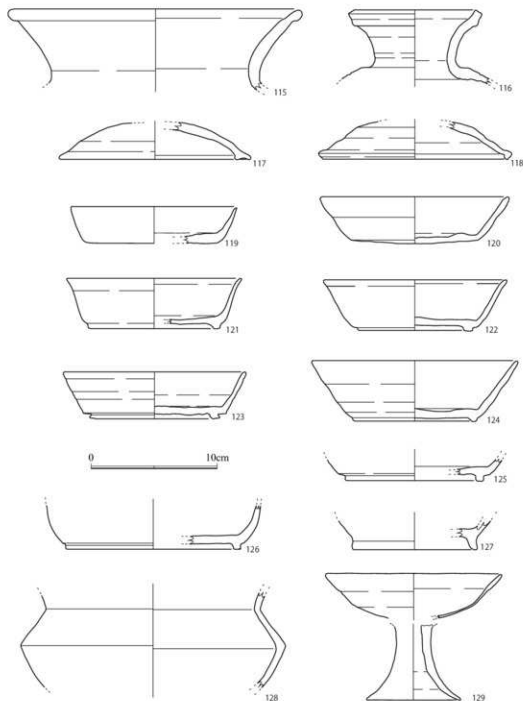


図30 SD022出土遺物1 (S= 1/3)

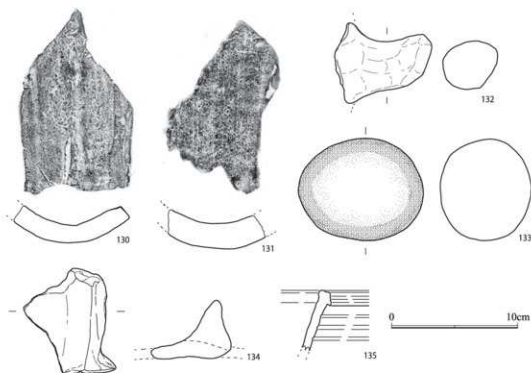


図31 SD022出土遺物2 (S= 1 / 3)

4.8cm。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は肥厚し2条の沈線をめぐらせる。焼成は良好で色調は灰赤色を呈し、胎土に2mm大の石英が混じる。

SD001-2 埋没後に掘削され、8世紀末ごろに埋没したと考えられる。

SD024 (図32, PL. 5-3)

調査区中央で検出した南北方向の溝である。40度西偏しており、やや蛇行する。北側は調査区外へ続き、南側はSD022に切られながらも南壁付近で延長部を確認でき、さらに南へ続くと考えられる。総延長19m。検出幅0.6～0.8m、底部幅0.3～0.5m。底面の標高は北端で8.3m、南端で8.45mを測り、北へ向かって低く傾斜している。ただし土層を観察する限りでは流水の形跡はみられない。断面逆台形で底面は平坦である。埋土は褐色。遺物はコンテナ1箱程度が出土したものの、図化できる資料はない。弥生土器を多く包蔵することから、弥生時代の遺構であろう。

SD026 (図33)

調査区南西部で検出した東西方向の溝である。75度東偏しており、SD001-2と平行する。東側はSD022に切られるが、すでに浅く立ち上がりつつある。西側は調査区外へ続いており、調査区内では11mを確認している。検出幅0.5～0.9m、底部幅0.5～0.7m。底面の標高は東側で8.55m、西側で8.4mを測り西側へ向かって深くなる。埋土は暗褐色。SD026の埋没後にSBO47が形成され

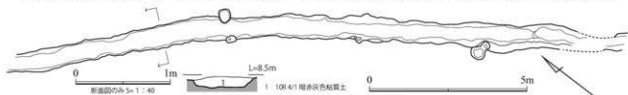


図32 SD024 (S= 1 / 120)

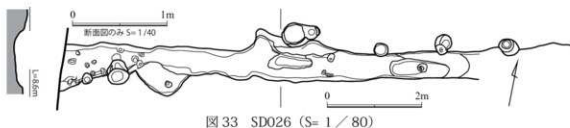


図 33 SD026 (S= 1 / 80)

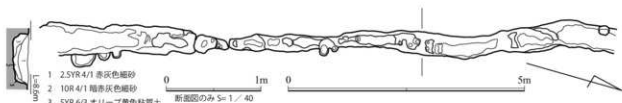


図 34 SD029 (S= 1 / 80)

ている。

出土遺物は土師器、須恵器。図化できる資料を欠くが、須恵器の形態から7世紀末ごろと考えられる。

SD029 (図 34, PL. 5-4)

調査区中央で検出した南北方向の溝である。15度西偏。北側は調査区外へ続き、南側は攪乱に破壊される。中ほどで浅くなり途切れるが、削平によるもので一連の遺構であると判断して同一遺構としている。検出幅 0.2～0.7 m、底部幅 0.1～0.6 m、総延長 12 m。底面の標高は北端で 8.2 m、南端で 8.4 mと北側に向かって低く傾斜するが、底面は起伏が大きく一定の傾きを示すわけではない。検出面からの深さは 0.1～0.2 m程度。

出土遺物は弥生土器が主体となる。須恵器が1点のみ出土しているが混入か。

SD033 (図 35)

調査区北側で検出した南北方向の溝である。22度西偏しており若干東に向かって湾曲する。北側は調査区外へ続き、調査をおこなったのは 5.7 m である。検出幅 0.6～1.2 m。底部は凹凸が顕著で平坦部分は少ない。最も深い部分で標高 8.1 m、検出面からの深さは 0.3 m。南北方向の明らかな傾きはみとめられない。南側では底面の一部に被熱痕がみられる。SK034 より古く、SB045 や SK032 より新しい。

出土遺物は弥生土器に限られることから、弥生時代の遺構であろう。

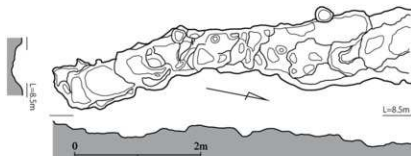


図 35 SD033 (S= 1 / 60)

6. 井戸 (SE)

SE031 (図 36、PL. 5-5・6)

2 区の SD022 の北 10 m で検出した井戸で深さ 3 m を確認した。深さ 160 cm 以下の掘削では重機を使用した。検出面の平面形は径 130 から 140 cm の略円形である。4、50 cm 掘削した標高 8.1 m で径 90 cm を測り、ここで屈曲して径 10 cm ほどの底まで直線的にすぼまる。地山は標高 5.7 m で八女ロームとなり、底はこれから 20 cm 深い。屈曲部以下では円形の井戸枠範囲を埋土の違いとして確認した。その径は 55 ~ 43 cm ほどで、下部では井戸枠自体の痕跡を確認できる。標高 6.6 m 以下では確認できていないが、掘方が小さくなる底付近では井戸枠が途切れる部分が想定される。底には甕 (142) が正置されており、別個体の甕、カマド (154)、土師器碗 (145)、瓦片などが出土した。埋土上部は暗灰黄色のやや明るい粘質土で、下部は暗青灰色の粘土で黄色ブロックを含む。遺物は土師器の小片が主で他に須恵器、瓦片などがみられる。上部は少なく、下部ではやや多い。下部の粘土層は木片などの有機物を含むが製品は確認できていない。井戸枠は時期的に列り抜き材が想定される。

136・138 は弥生土器甕の口縁部である。く字形口縁。138 は外面縦ハケ、内面ナデ調整。137 は土師器の甕である。く字形口縁で胴部の張りは弱い。口縁部外面はナデ、内面は横ハケ、胴部外面は縦ハケ、内面はケズリで調整する。139・140 は土師器の甕。139 は頸部から口縁部にかけて強く外反しながら開く。把手は胴部から直交方向に小さく突出する。口縁部をナデ、胴部内面をケズリ、胴部外面を縦ハケで調整する。口縁部を中心にススが吸着する。140 は把手と胴部の一部が遺存する。把手は短小で先端がやや上向きに取り付く。胴外面縦ハケ、内面ケズリ。141 は土師器の甕で胴部は張らずに底部へ向かってすぼむ。胴部内面をケズリ調整。142 は土師器の甕で胴部の張りは弱く、頸部で屈折して口縁部は直線的に開く。口縁部外面はナデ、内面は横ハケ、胴部外面は縦ハケ、内面はケズリで調整する。143 は土師器の皿。144 は須恵器長頸壺の胴部である。低く直立する高台をもつ。145 は土師器の高環。口縁部はおおむね直線的に開く。146 は土師器皿。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら開く。147 は土師器の甕。如意状口縁で胴部の張りは弱い。148 は須恵器の坏蓋。149 は土師器の坏身。高台は高く直立する。150 は土師器の坏身。高台は外へ向かってやや張り出す。151 は土師器の甕。く字形口縁で胴部の張りはやや弱い。口縁部をナデ、胴部内面をケズリ、胴部外面を縦ハケで調整する。152 は土師器の皿。153 は平瓦。焼成は軟質で灰白色。凹面に布目圧痕、凸面に平行線タタキ痕が残る。154 は移動式カマド。掲載した 2 点のほか同一個体と思われる破片が十数点ある。各部位をハケ成形したうえで接合部を中心にナデ調整。底の下面に多量のススが吸着する。

出土遺物から、時期は 8 世紀末から 9 世紀初頭と考えられる。

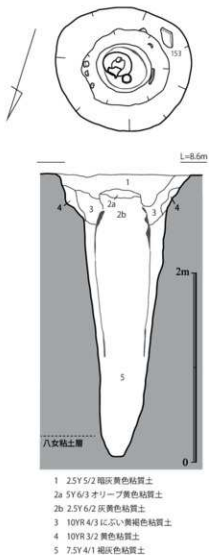


図 36 SE031 (S= 1 / 40)

- 1 25Y 5/2 暗灰黄色粘質土
- 2a 5Y 6/3 オリーブ黄色粘質土
- 2b 2.5Y 6/2 灰黄色粘質土
- 3 10YR 4/3 ぶい黄褐色粘質土
- 4 10YR 3/2 黄色粘質土
- 5 7.5Y 4/1 褐色粘質土



图 37 SE031 出土遺物 1 (S= 1 / 3)

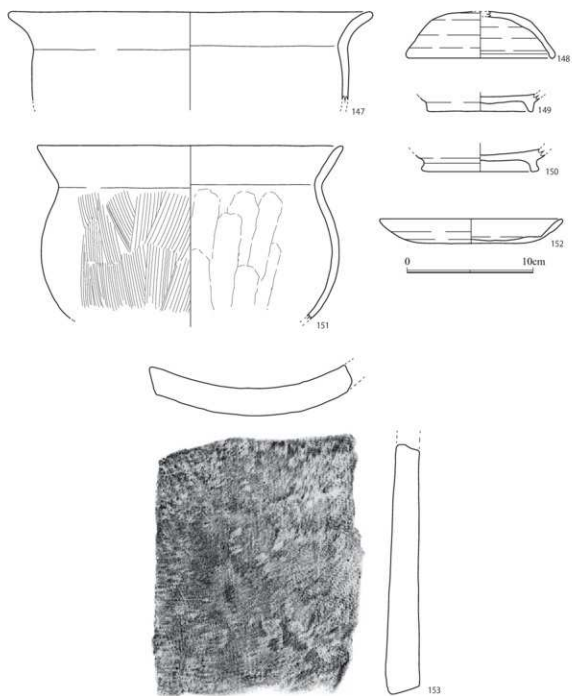


图 38 SE031 出土遺物 2 (S= 1 / 3)

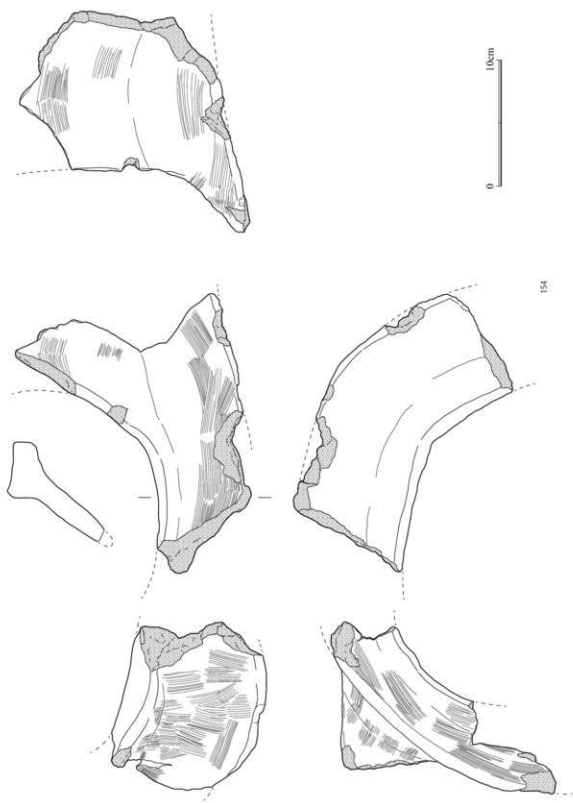


图 39 SE031 出土遺物 3 (S= 1 / 3)

7. 土坑 (SK)

SK003 (図 40)

調査区南東部で検出した円形土坑。直径 0.9 m ですり鉢状に中央が深くなり、底面で標高 8.2 m を測る。SD001-1 屈曲部の内側に接する地点に位置し、切り合いは確認していない。弥生土器と土師器が出土している。

SK006 (図 40)

調査区東側で検出した。東西 2.2 m、南北 0.8 m の溝状遺構。最も深い部分の標高は 8.3 m で検出面から 0.3 m の深さにあたる。東側を SK009 に切られる。出土遺物は弥生土器。

SK007 (図 40, PL. 6-1)

調査区東側で検出した。東西 2.0 m、南北 0.4 ~ 0.8 m の溝状遺構。底面は起伏が大きく、最も深

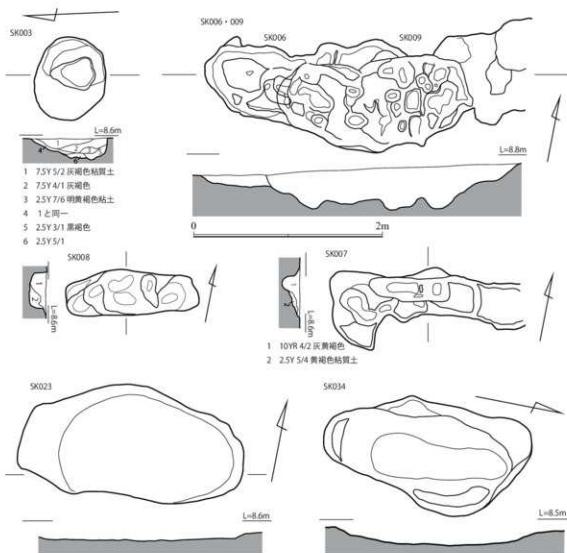


図 40 土坑 (S= 1 / 40)

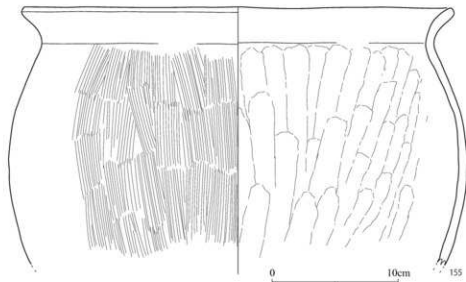


図 41 SK023 出土遺物 (S= 1/3)

い位置で検出面から 20cm ほど。東端を SD002 に切られる。出土遺物は土師器、須恵器。156 は土師器の甕。口径 15.3cm、頸部径 13.5cm、残存高 3.9cm。口縁部は短く外反する。色調は橙色で 1 mm 大の長石をふくむ。

SK008 (図 40, PL. 6-1)

調査区東側で検出した。東西 1.4 m、南北 0.6 m の溝状遺構。検出面からの深さは 0.2 m で標高 8.3 m にあたる。底面は起伏が大きい。弥生土器、土師器が出土する。

SK009 (図 40)

調査区東側で検出した。東西 2.1 m、南北 1.2 m の楕円形土坑。底面は起伏が激しく平坦部分が少ない。最も深い部分は標高 8.2 m で検出面からの深さは 0.3 m。弥生土器、土師器をふくむ。

SK023 (図 40, PL. 6-2)

調査区南側で検出した土坑である。SD001-2 の西端肩部に位置しており、同遺構を段下げしたときに確認した。東西 1.2 m、南北 0.7 m の楕円形を呈し、検出面からの深さは 5 cm 程度と浅い。埋土は暗褐色。弥生土器の甕 (155) が潰れた状態で出土している。

SK034 (図 40, PL. 6-4)

調査区北部で検出した。南北 2.2 m、東西 1.3 m の楕円形。検出面からの深さは 15cm 程度で中央が浅くくぼむ形態。弥生土器が出土している。

8. 不明遺構 (SX)

SX004 (図 42)

調査区南東部で検出した不整形の掘り込み。長軸 2.7 m、短軸 2.2 m で平面形態は三角形に近い。検出面からの深さは 0.1 m とごく浅い。底面は平坦だが北へ向かって若干の傾斜がみとめられる。出土遺物は土師器、須恵器、移動式カマド。

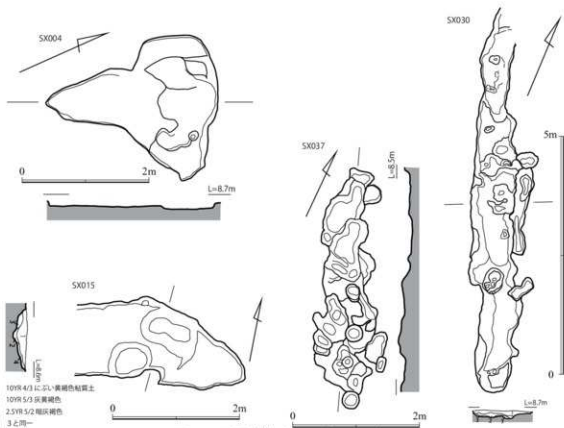


図42 不明遺構 (S= 1 / 60・80)

SX015 (図42)

調査区北東部で検出した。東西3.7m、南北1.3m。最も深い部分で検出面から0.2m。底面はおおむね平坦で中央部に浅いくぼみが2か所ある。埋土は茶色。160は土師器の高坏。底部は約2cmの器厚をもたせて安定化を図る。

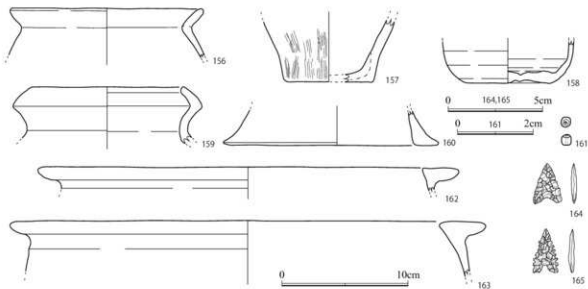


図43 不明遺構出土遺物 (S= 1 / 1・2・3)

SX030 (図 42)

調査区北部で検出した溝状の掘り込みである。南北 8.0 m、東西 0.5 ~ 1.2 m で南北に長細い。北側を SD024 に切られるが、反対側の肩部では延長部がみられない。最も深い部分で検出面から 0.3 m。検出時には溝と考えて掘削をおこなったが、ひと続きの溝というよりは 2 ~ 3 m ほどのごく短い溝状のくぼみが連続する状況で、周辺には浅い小穴が多数みられる。遺構の性格を判断しかねるため、SX とした。底面は起伏が大きく、複数箇所に被熱痕が生成する。埋土は暗褐色。出土遺物は弥生土器で上層からの出土が多い。159 は袋状口縁壺。頸部は比較的短小。内外面ともにナデ調整。162・163 は甕の口縁端部。鋤先状口縁。出土遺物から弥生時代の遺構だろう。

SX037 (図 42, PL. 6 - 5)

調査区北部で黒色土を除去した際に検出した。南北 3.4 m、東西 1.3 m の不整形遺構。南北に長い溝状であるが、凹凸が大きく、溝というより小穴が集中した状況である。深さは 10 ~ 15 cm。出土遺物はほとんどないが、埋土や堆積関係から弥生時代と考えられる。

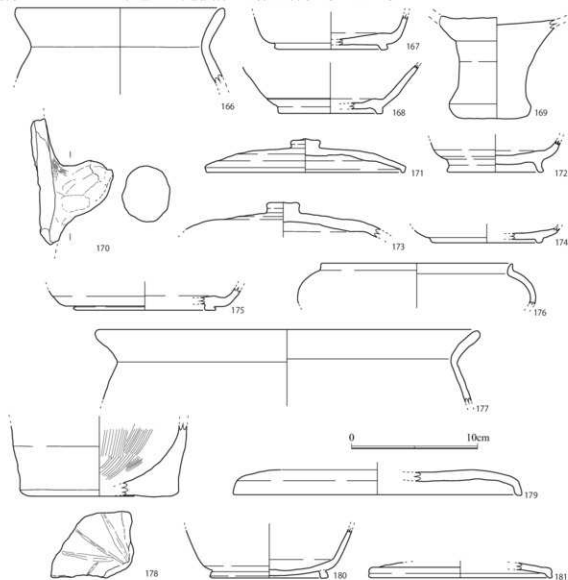


図 44 包含層出土遺物 1 (S= 1 / 3)

9. その他の出土遺物

166～169は包含層の3層出土。166は土師器甕の口縁部。く字形口縁。167は須恵器坏身の底部。高台は低くやや外へ向かって張る。169は土師器高坏の脚部である。168は土師器坏身の底部。高台は低く直立する。内外面ともにナデ調整。外面に沈線を1条施す。

170・171は包含層の4層出土。170は土師器の甕の把手。把手は比較的短く断面円形。体部との接合部にハケメがみられる。171は須恵器の坏蓋である。扁平なつまみを取り付き、口縁端部を短く折り曲げる。

172～181は包含層の5層出土。172は須恵器坏身の底部である。高台は高く、やや外へ向かって張り出す。内外面ともにナデ調整。焼成は良好で色調は灰色。173は須恵器の坏蓋である。つまみをもち、内外面ともにナデ調整。174は土師器坏身の底部である。高台は低く直立する。175は須恵器の坏身。高台は非常に低い。176は須恵器無頸壺の口縁部。口頸部はごくわずかに外反し、

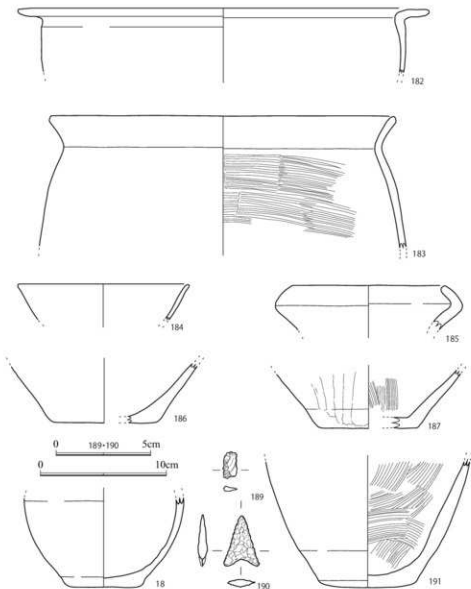


図45 包含層出土遺物2 (S= 1/2・3)

胴部の張りは強い。177は土師器甕の口縁部。く字形口縁で口縁部は外反気味に開く。178は弥生土器の甕。平底からほぼ垂直に立ち上がる。内面縦ハケ、外面ナデ。底面に線刻を施す。179は須恵器の坏蓋。180は須恵器坏身の底部。高台は若干外へ向かって張る。181は須恵器の坏蓋。口縁端部で屈折する。

182～191は包含層の6層出土。182は弥生土器の甕。鋤先状口縁で胴部の張りは弱い。183は土師器甕の口縁部。く字形口縁で胴部の張りは弱い。口縁部内面をナデ、胴部内面を横ハケで調整する。184は須恵器の坏身。口縁部は直線的に開く。185は弥生土器の袋状口縁壺。186は弥生土器の甕の底部。187は弥生土器の甕の底部。外面をケズリ、内面を縦ハケで調整する。188は土師器壺の底部。平底で胴部の張りは強い。190は石鏡。全長2.7cm、最大幅1.9cm、重量1.5g。凹基で側縁を直線的に剥離調整する。安山岩製か。191は弥生土器甕の口縁部。底部から胴部にかけておおむね直線的に立ち上がる。内面をハケ調整しており、上方ほど縦方向のハケ目が多い。

192～198はSX005出土。192は甕棺の口縁部で口径48.8cm。口縁部が水平方向に開き、胴部が強張り張る形態をとる。胎土は橙色で2～3mm大の石英が混じる。193は弥生土器の甕。口縁部は湾曲しながら外反する。194は弥生土器の甕。口縁部でほぼ水平に直交する。195は弥生土器の甕。胴部はわずかな張りをもち、口縁部で水平方向に開く。196は弥生土器の甕である。口縁部は逆L字形で端部は若干垂れ下がる。口縁部上面には円形浮文を貼り付ける。胎土に砂粒が多く混じる。197は須恵器の壺。頸部から口縁部にかけて緩やかに開き、口縁端部は一部が5mm程度突出している内。198は弥生土器の甕。口縁部は逆L字形を呈して端部がやや肥厚する。199は弥生土器の甕。口縁端部の厚みが1cm以上と分厚い。検出面出土。200は弥生土器の甕の底部。1～2mm大の石英が混じる。SP1004出土。201は弥生土器の袋状口縁壺の口縁部。SP1036出土。202は弥生土器の袋状口縁壺の口縁部。SP1218出土。204は弥生土器の甕の口縁部。く字形口縁で胴部の張り

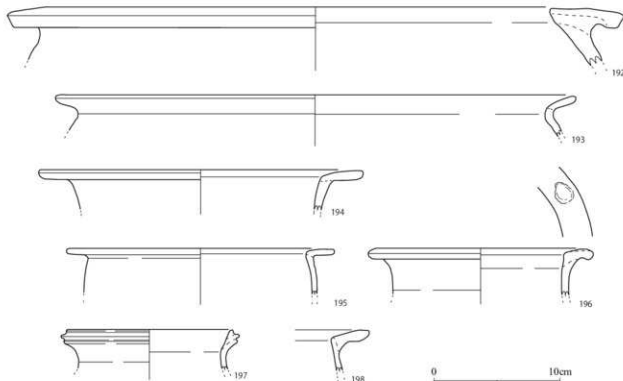


図46 その他の出土遺物1 (S= 1/3)

は弱い。口縁部はナデ、胴部内面はケズリ、胴部外面は縦ハケで調整する。SP1067 出土。205 は弥生土器の甕の口縁部。胴部外面は縦ハケ、胴部内面はケズリがみられる。SP1106 出土。203 は弥生土器の甕の口縁部。く字形口縁で胴部の張りはやや弱い。出土地点不明。206 は弥生土器の甕の底部。底部から胴部にかけて直線的に開く。207 は須恵器甕の口縁部。SP1150 出土。208 は須恵器の坏蓋のつまみ。SP1031 出土。209 は土師器の甕の把手。断面円形で把手は比較的短小。出土地点不明。213 は須恵器壺の口縁部。口縁端部を肥厚させて沈線を施す。頸部に縦方向の線刻あり。胴部外面にタタキ。焼成はやや軟質。SP1099。211 は須恵器坏身である。高台は低く、外へ向かってつまみ出す。検出面出土。212 は須恵器の坏身。高台は低くほぼ直立する。出土地点不明。214 は須恵器の坏身。SP1067 出土。

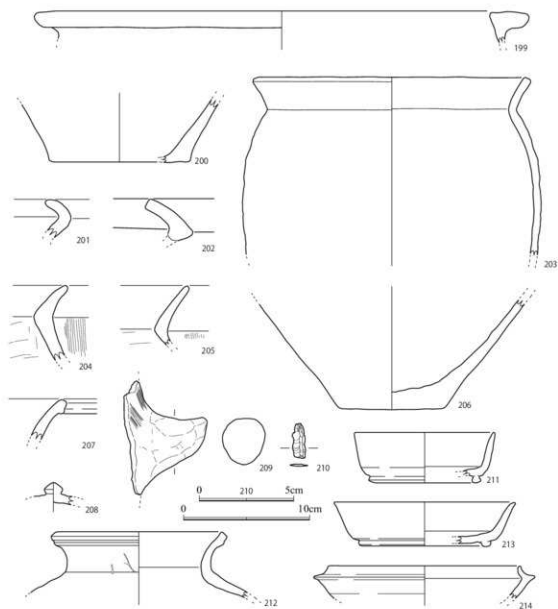


図 47 その他の出土遺物 2 (S= 1/2・3)

Ⅲ. まとめ

1) 185次調査の成果

本調査では弥生時代から平安時代に至る各時代の遺構を確認した。とくに弥生時代と7～8世紀に遺構の形成が活発化することが明らかになり、周辺の調査を通じた推定を裏付ける結果となった。遺構の展開を以下に整理する。

弥生時代の遺物は調査区全域で確認されるが、遺構は北半部に集中する傾向を示し、また弥生土器を主体とする黒色土包含層も北東部に限って堆積していた。南側でもSC035やSK024などの遺構は残っており、周辺の調査成果や地形をふまえると南側にも弥生時代の集落が展開した可能性は高く、後世の遺構形成や削平によって消失したものと思われる。北側も遺存状態は良好とは言えず、遺構の大部分は本来の形状を推定することも困難である。とくに中央部では、SX032やSX037などが微小な起伏をともないながら3～4mにわたって掘り込まれており、建物跡の可能性も想起されるものの、プランが不明瞭であるために特定に至らなかった。同様にSD030東側のビット群や調査区東側で平行関係にある土坑群も、建物を構成する可能性があるが具体的な推定は難しい。北側の20・23・114次調査では、台地を東西に貫く大溝の北側で鋳造関連遺物や特殊遺構が確認されており、大溝の南側にあたる本調査区との関係が注目される。

古墳時代の小塚期を経て7世紀には大規模な溝であるSD001が掘削される。またSD001-1とほぼ平行するSD002、SD002と直交方向にあり終端を接するSD012は同時期のセットになる溝とみられ、SD001とも何らかの関係があるとみられる。SD001は東西方向、南北方向ともに0.5m以上の深さをもつが、内側を並走するSD002とSD012は相対的に浅い。これらが7世紀後半から末にかけて埋没した後、8世紀初頭にSD001-2のやや北側にSD022を新しく掘削する。溝の規模や形態は若干異なるものの、SD001-2の性格を踏襲したものと推測できよう。これほど大規模な掘削を重ねる一方で、調査区内では同時期の明確な遺構をほとんど把握できていない。近い時期の遺構にSE031があるが、SD022埋没後の8世紀末から9世紀初頭にあたる。ビットには7～8世紀の遺物もふくまれるが、活動内容を直接的に示す遺構は欠落する。

その後、遺構面は8世紀までの遺物をふくむ包含層に被覆されるが、SB038・040など包含層の堆積後に形成された遺構が複数確認される。大規模な遺構は少ないものの、居住活動は継続したと考えられる。

2) SD001の性格

本調査で検出されたSD001は、周辺の調査区において類似する溝が確認されている。185次調査区の北側にあたる114次調査では、SD001-1の延長上にSD-2040が位置し、さらに90度西折してSD-2020が延びる。また両調査区の西側に位置する23次調査では、SD001やSD-2040と平行する直線的な溝SD-89が検出されている。出土遺物および堆積関係から、114次SD-2020・2040は7世紀初頭に掘削されて同後半に埋没、23次SD-89は7世紀前半に掘削、同後半まで機能し7世紀末から8世紀初頭には埋没していたとされる。いずれも185次SD001の展開と重なっており、溝の規模や形態を鑑みても7世紀末ごろまでに廃絶された一連の遺構と考えて差し支えないだろう。これらの区画溝に圍繞される領域は東西約90m、南北約115mの長方形で、座標北に対して10度前後西偏するものの、正方位を強く意識した配置をとる。

今回の調査では、7世紀代に機能した建物等の遺構は区画の内側で発見できなかった。一方で114

次では区画の北東隅で布掘り建物の可能性がある溝群や列状柱穴が見つかった。いずれも出土遺物が少なく、区画溝との同時性を保証できるわけではないが、主軸方向はおおむね一致しており、何らかの関連が想定される。23次では区画の外部ながら梁行3間、桁行4間の掘立柱建物が東西に3棟並んで検出された。これらは埋土や遺物の時期が肖似することから同時に存在したと考えられ、また建物の間隙が狭いことから各棟を桁で連結したひとつの建物（倉庫）である可能性が指摘されている。SD-89とはわずかに軸方向がずれるものの、出土遺物の時期から併存したと考えてよい。さらにSD-89では上層から下層まで多量の瓦を包蔵しており、とくに下層では神ノ前窯跡焼成品と共通する瓦がみられることから、初期瓦の供給先のひとつとして注目されている。倉庫群にともなう柱穴には瓦はふくまれず、区画の内側に瓦葺建物が存在した可能性が高い。現状では区画の北半を中心に大型建物が立ち並ぶ様相が復元される。

また7世紀の区画に前後する時期の土地利用についても注目すべき点が多い。114次調査ではSD-2020・2040に切られる溝SD-4040・2060を検出している。位置関係はわずかにずれるが、おおむね正方位に則ることから、これらをより古い時期の先行する区画溝とみる意見がある。23次や185次では7世紀を遡る区画溝は確認していないが、掘削年代の確定していない185次SD002・012がSD001に先行する可能性はある。前者が完全に埋没するのは7世紀後半から同末ごろであるが、北側では二重区画は確認できないため、平行する溝の一方は廃絶していたものとみられる。114次調

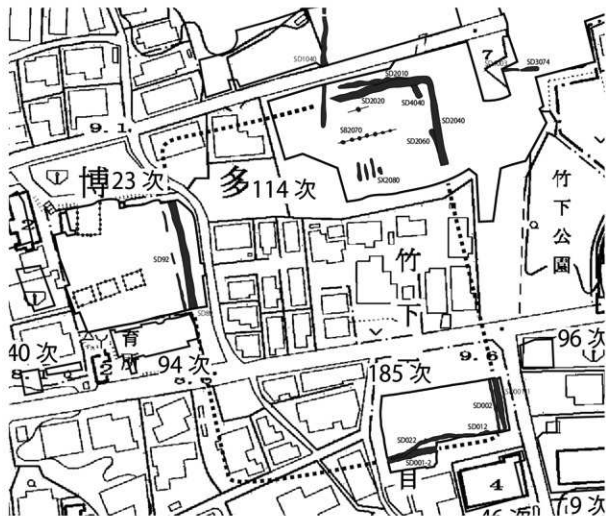


図 48 周辺調査区における古代の主要遺構

査区ではSD-4040・2060の外側に7世紀の区画溝を掘削することから、185次SD002・012が古い時期の区画を構成する可能性は排除できない。なおSD-4040と2060の間には10mほどの間隙があり、出入口の可能性が指摘される。この東側では那珂八幡古墳に向かってのびる道路が古墳時代開始期に敷設されたと考えられており（久住1999）、古代においても東側が主要な交通路として利用されたのかもしれない。

本調査区においては、7世紀末にSD001が埋没して間もなくSD022が掘削される。北側においてもすでに区画溝は機能を喪失しているが、114次調査では8世紀の遺物を主体とする正方位に近い溝SD1040・2010が、また東側の20次調査でも8世紀代の南北溝SD-02が確認されており、区画溝をとまなう土地利用は継続していると考えられる。区画の意義そのものが継承されているのか検討の余地を残すものの、古代において当該地点が特別な意味をもち続けたことは確かだろう。

3) 周辺の地形改変

那珂遺跡群の立地する丘陵は南北方向にのびる尾根状の地形であり、現況では本調査区の東50m付近を頂点として東西に緩傾斜をなして下っていく。この傾斜は十分に視認できる程度に顕著であり、最高点から西へ200mほどの包蔵地縁辺とは3m以上もの比高差がある。また94次調査区の南側に

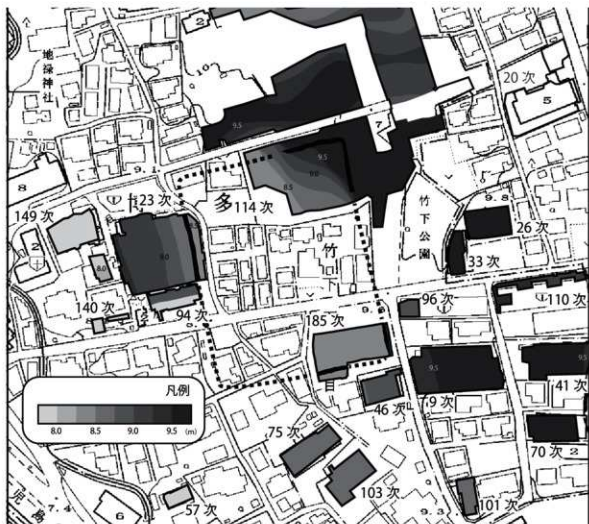


図49 周辺調査区の鳥栖ルーム層検出高 (S=1/500)

は2m以上落ち込む鞍部が東西方向に入り込んでおり、試掘調査の成果もふまえると、本調査区の西側にまで及ぶ可能性がある。現況でも本調査区北側の道路部分は周辺よりも低くなっており、鞍部に沿って道が形成された可能性も考えられよう。

ところが周辺調査から得られる鳥栖ローム層の検出高をつないでいくと、現況とは異なる古代の地形がうかがえる。当然ながら各地点の遺構検出面は、人間の活動にともなう削平を幾度となく受けており、とくに近代以降の開発による影響は甚大である。一方で包含層の時期から往時の地形を推定できる場合もあり、堆積状況によっては有意な情報が得られる可能性もある。以上を前提として各地の調査成果を検討すると、鳥栖ローム層の検出高は図49のようになる。まず東側は33次調査の標高11m前後を最高点として、西側へ向かって徐々に下降傾向を示す。9次調査では耕作土直下で鳥栖ローム層に達するが、96次および185次調査では直上に古代の包含層が堆積しており古地形が良好に遺存すると思われる。つぎに南側では、75・103次調査区は削平により表土直下で鳥栖ローム層を検出するが、本調査区に南接する46次調査では時期不明ながら遺物包含層を挟んでいる。北側の114次調査区は近現代の著しい削平によって本来の地形環境がほぼ失われているものの、調査区北半および東側では9.5m以上の標高で鳥栖ローム層を確認できる。一方で調査区南西部は押し並べて8.5m前後での検出にとどまる。西側では、23次調査区において中世以前の包含層下で遺構を検出している。調査区内では西側に向かって漸進的に高まり、調査区西端で9.2m程度を測る。ただし当該地点の南側には鞍部が湾入し、さらに西側は那珂川の氾濫原にあたるため、その周辺は著しく落ち込んでいる。

数字の列挙に終始したが、台地全体は西側へ向かって落ち込む自然地形でありながら、23次調査区では区画溝の西側でむしろ鳥栖ローム層が隆起する点が注目される。当該地点における包含層の堆積年代は中世以前というほかに特定しがたいものの、土壌の色調を周辺遺構と比較すると古代以前に限られる可能性が高く、区画溝が機能していた時期の地形をとどめている可能性が生じる。

さて、本調査区のSD001-1は東側肩部が調査区外に続き未掘であるが、一部拡張した箇所において、溝の西側肩部よりも15～20cmほど高いことが判明した。調査区全体がほぼ平坦であり、なおかつSD001が埋没して間もなく包含層が堆積していることを考えると、この比高差は区画溝が機能した時期の様態をそのまま現している可能性が非常に高い。また調査区南西部ではSD001-2の南北で10cmほどの標高差が生じるほか、調査区南東部と46次調査の北側では検出高に最大40cmの差があり、南辺においても溝の内外で高低差が存在する可能性がある。かく乱の影響が著大な114次調査区においても、偶然かもしれないが、東西のSD-2020で60cm、南北のSD-2040では1.1mの比高差が生じており、いずれも内側のほうが低い。

もう1点興味深いのは、区画溝の内側では鳥栖ローム層が一律に8.5m前後で検出されており、広大な区画全体がほぼ水平な点である。114次調査区は近現代の削平による帰結も否定できないし、SD-2020の南側は9.1mとやや高いものの、尾根上にありながら東西方向の標高が一致する点はある人為的な地形改変を示唆する。185次調査区の北東部には弥生土器をふくむ黒色土が堆積していたが、外側ほど堆積は薄く、部分的にしか検出できなかった。黒色土が確認された地点は鳥栖ローム層の上面が10cmほど低く、黒色土の検出高が8.5m程度であった。

以上を総合的に考えると、7世紀に区画溝を掘削するにあたり、その内側を水平に整地した可能性が浮かび上がる。全体を数十cm掘り下げたというよりは、比較的平坦なくぼ地を選び、局所的な起伏を削平することで地形を整えたのではないだろうか。その際にもともと堆積していた黒色土や古い時期の遺構が部分的に失われたものと類推される。

また遺構面が区画の機能した時期の地形をとどめるならば、114・185次調査で7世紀代の遺構がほとんど発見されないことも、本来の利用状況を反映する可能性が高い。すなわち遺構密度が低いのは削平の影響ではなく内部に構造物が少ないためと考えられる。

4) 古代の比恵・那珂遺跡群における位置づけ

比恵・那珂遺跡群ではこれまでも6～7世紀の大規模区画や大型建物群が多くの地点で発見されており、「那津官家」との関連がたびたび論及されている。ミヤケに関連する遺構・遺物としては、区画を示す柵状遺構や溝、倉庫などの建物跡、建物に伴う瓦などがあり、6世紀後半に比恵遺跡群で出現し、7世紀にはいと那珂遺跡群においても類似する遺構が成立する。比恵遺跡群では柵状遺構に囲まれた倉庫群が典型的であるが、那珂遺跡群では倉庫群が柵状遺構をとまわず、区画溝が一般的である。遺跡群南端部では37・52・56・59・117・179次調査で東西約70mの区画溝と長倉建物を検出しており、後者には7世紀初頭と同中頃から後半の建物が確認されている。また185次調査区から東へ200mほどの120・122・190次調査では7世紀に掘削・利用された南北溝と長倉建物が検出されている。

近年の調査を経て、7世紀を隆盛期とする動態が那珂遺跡群の南部一帯で連動することが明らかになり、比恵遺跡群の機能を継承する形で整備され、やがてその機能を大宰府へ移管していくという従来の理解があらためて裏付けられた。一方で、本調査を通じて7世紀初頭以前に先行する区画がほぼ重なる配置で存在した可能性が浮上した。遺物が少ないため掘削された時期は明らかでないが、東光寺剣塚古墳が築造される6世紀中ごろを境に遺構が増加に転じることから、6世紀後半における遺跡群の動態を再検討する必要がある。

また本調査では溝の掘削にともなう区画全体に及ぶ整地の可能性もみえた。6世紀後半の比恵遺跡群や有田遺跡群に成立する施設群は、必ずしも正方位に則るわけではなく地形に合わせた配置をとる(菅波2013)。7世紀の区画溝や建物は、多少の誤差はともないつつも正方位におおむね合致しており、方位の規範に対するいっそう忠実な態度がうかがえる。この原則を遵守するために、地形上の制約が生じる土地では地形改変も厭わなかったのかもしれない。

7世紀に那珂遺跡群で展開する施設群は、南部の数100mの領域に集約される点に特徴がある。中央には丘陵の尾根が南北に通る、古墳時代には道路として整備されていた。道路じたいの存続は定かでないが、この尾根を挟んだ東西に施設群が連なる光景を復元することができ、広大な土地が利用されたことがわかる。

『日本書紀』の「那津官家」に関する記事は6世紀を最後にみられなくなり、代わって7世紀には「筑紫大宰」という記述が繰り返され、外国使節の受入れなどにあたったとされる。那珂遺跡群における施設群の動態は「筑紫大宰」との関連から注目されており、地形改変をとまぬ大規模開発の背景として留意する必要がある。

参考文献

- 久住猛雄 1999 「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号、九州考古学会
菅波正人 2013 「律令成立期前後の福岡」『新修福岡市史特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市

写真図版



1 1区全景 北から



2 2区全景 東から



1 SB038 西から



2 SB039 南から



3 SB040 東から



4 SB041 南から



5 SB042・043 南から



6 SC035 北西から



1 SD001-1・002 北壁土層



2 SD001-1・002 北から



3 SD001-1 拡張 北から



1 SD001-2・022 東から



2 SD001-2・022 西から



3 SD001-2 出土状況 西から



1 SD012 西から



2 SD022 東端 西から



3 SD024 北東から



4 SD029 南から



5 SE031 井戸枠検出 北から



6 SE031 断面 北から



1 SK007・008 北から



2 SK023 東から



3 SX016 南から



4 SX033・034 北から



5 SX037 北西から



6 北壁土層

報告書抄録

ふりがな	なか 91 一なかいせきぐんだい185じょうさほうこく一							
書名	那珂 91							
副書名	—那珂遺跡群第185次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1507集							
編著者名	鶴来航介(編)・池田祐司							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
なかいせきぐんだい 那珂遺跡群	福岡県福岡市 博多区竹下	40132	0085	33° 34' 4"	130° 26' 8"	20210419 ～ 20210810	850.04	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
那珂遺跡群	集落	弥生時代～古代	竪穴建物、溝、落ち込み	弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器、鉄製品		23次、114次調査で検出された区画溝の南側を確認		
要約	<p>那珂遺跡群は後期旧石器時代から中世にかけて遺構が形成される複合遺跡である。とくに古代には正方位の溝や大型建物が広範囲で見つかっており、北接する比恵遺跡群とあわせて地域の中心的な役割を果たしたことがうかがえる。</p> <p>本調査では、北側の23次・114次調査区で検出された7世紀の区画溝の東辺延長部および南辺を確認した。区画は東西約90m、南北約115mと大規模であり、23次で多量の初期瓦をともなうことから、内側に公的な施設群が存在した可能性が高い。また8世紀にはこの区画溝を重複するように東西方向、南北方向の溝を掘削しており、その後の土地利用を考えるうえで注目される。その他、弥生時代や平安時代の遺構を確認した。</p>							

那珂91

—那珂遺跡群第185次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1507集

2024(令和6)年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 タスク
〒810-0042 福岡市中央区赤坂2丁目2番5号

